

平成 2 2 年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉 川 大 学 F D 委 員 会

は じ め に

—ミクロ・レベル FD の組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）をミクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。FD を三層に分けて考察することの意義とその具体的な内容については、これまでも FD 研修会等で折にふれてお伝えしてきましたが、2009 年に学士教育課程と大学院教育課程における FD が義務化され、今年で 3 年目を迎えることから、改めて FD 三層論について確認し、今後の FD 活動の発展につなげたいと思います。※

ミクロ・レベルの FD の目的は教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学で FD の名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学 FD 委員会が中心になって行う FD 活動はミクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務委員等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらミドル・レベルと同様に、そのための具体的な FD 研修会が開催されるわけではありません。現行の大学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業が FD 活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルの FD 活動は、その性格上、全学的な視点と学部的な視点が要求されますが、ミクロ・レベルの FD は、長いあいだ各教員の努力義務のようにとらえられてきました。したがって、ワークショップや研修会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたとは言い難い状況にありました。しかし、2007 年以降、本学では、複数の学部で、また学士課程教育センターが中心となって積極的に授業改善に取り組んでいます。その具体的な試みがピアレビューであり、センター主催の年間 10 回以上にも及ぶ授業方法改善のためのワークショップの実施です。

今後は、ミクロ・レベルの FD を、教員のキャリアパスの問題と連動させ、助教、准教授、教授のそれぞれの職位に応じた FD のフェーズ（わかる→実践できる→開発できる→教えられる）を設定することで、個々の教員がファカルティの一員として有機的に FD にかかわれる体制を用意していきたいと考えています。

※ 2007 年に大学院設置基準が見直され、また、2008 年に大学設置基準が見直されたことにより、2009 年度から学士教育課程と大学院教育課程において FD の実施が義務化されました。

大学 FD 委員会委員長

教学部長 菊池 重雄

目 次

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会	
(1) 委員会の目的	1
(2) 委員構成	1
(3) 今年度の活動計画及び課題	1
(4) 活動状況	2
(5) 活動の成果	5
(6) 今後に向けて	6
2. 学部の活動.....	8

II 教員研修

1. プレゼンテーション研修会	
(1) 実施の概要	40
(2) 研修プログラム内容	40
(3) 実施の状況	41
(4) 実施後のアンケートから	41
(5) ディスカッションの実施	45
(6) 実施の成果	50
(7) 今後の課題.....	51
2. 新任教員研修会	
(1) 研修プログラム内容	52
(2) 実施の成果	54
3. Blackboard@Tamagawa の活用	
(1) 活用事例報告	56

III コア科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要	64
2. 集計結果及び公表	64

参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事内容	79
2. プレゼンテーション研修会アンケート用紙	82
3. 「コア科目授業評価アンケート」用紙	83
4. 玉川大学 FD 委員会規程.....	84

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会

(1) 委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

- ① 玉川大学の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

(2) 委員構成

委員等	所 属	氏 名
委員長	教学部長	菊 池 重 雄
副委員長	学士課程教育センター長	大 藤 正
委員	文 学 部	茅 島 路 子
委員	農 学 部	富 田 信 一
委員	工 学 部	小 倉 研 治
委員	経 営 学 部	伊 藤 良 二
委員	教 育 学 部	宮 崎 豊
委員	芸 術 学 部	小 倉 康 之
委員	リベラルアーツ学部	小 山 雄 一 郎
委員	学 術 研 究 所	切 田 節 子
事務担当	学士課程教育センター	山 崎 千 鶴
事務担当	教 学 部 教 務 課	茂 村 恭 司
事務担当	教育企画部教育企画課	大 野 太 郎
事務担当	人事部研修センター	柳 原 達 宏

(3) 今年度の活動計画および課題

- ・大学 FD 委員会主催の多様な研修会を開催する。
- ・大学院 FD 委員会との連携を図る。
- ・教員相互の授業参観を推進する。
- ・コア科目の「学生による授業評価アンケート」を改訂し、実施する。

（４）活動状況

今年度は隔月に大学 FD 委員会を開催し、大学 FD 委員同士の共通認識を図るとともに、様々な取組を検討、実施することができた。委員会を欠席する委員はほとんどなく、積極的に活動することができたと考えている。

研修会等については、プレゼンテーション研修会、新任教員研修会についても、例年と同様に開催したほか、ライティングの指導法、学生評価、カリキュラム・マップの作成、授業計画書の作成、シラバスの作成、アクティブ・ラーニングの指導法など、ワークショップとして各内容を複数回開催した。さらに、新しい取組として、研修会「Blackboard システムを利用した補講の方法」を、eエデュケーションセンターとの協同にて開催することができた。補講については対面授業での対応が基本であるが、諸事情により対面授業での補講を実施することが難しい場合には、e-learning を利用した指導を補講として認めている。e-learning での補講を実施する際には、各学部の教務主任または学士課程教育センターがその内容を確認した上で実施の可否を判断することとなっているが、その際に求められるのは、対面授業と同程度の学習を学生に課しているかということである。Blackboard を利用した補講であっても、等しくそれが求められる。当該研修会は、その為の一つの例として、Power Point を取り込んだ講義の録画・配信について説明するものである。また、教員同士の情報交換の場の提供として、新規プログラム「教員懇談会」を開催した。

また、これまでの研修会等は、ミクロ・レベル（国立教育政策研究所 FDer 研究会 FD マップ参照）の FD を目的としたものに終始していたが、マクロ・レベルの研修会を開催することができた（12 月 20 日 テーマ：高等教育における学習プロセス管理の概念理解と取り組み 講師：国立大学財務・経営センター 金子元久教授）。

さらに、今年度開催した研修会等は多くが教員の授業・教授法の開発を目的としたものであるが、大学院 FD 委員会との共催にて開催した講演会「大学教員・大学院教員の FD とライフ・ステージ」（講師 東北大学 羽田貴史教授）は、教員個々のキャリア・パスをテーマにした。教育者であり研究者として、大学教員はそれぞれの立場において、どのように自らの開発を図っていかなければならないか、学生のための教授法ではなく、将来を見据えて、どのような力をつけていかなければならないか、講師は一つの指針を示してくれた。

大学授業の授業参観についても、大学 FD 委員会として、初めての取組を行なった。これまで、大学 FD 委員会として各学部での授業参観の取組を推奨してきたが、委員会が直接、関わることはなかった。今年度においては、各学部・学科の授業参観の取組に、公開範囲の拡大をお願いした。つまり、参観者について、当該学部・学科の教員、本大学の教員、本学園の教職員のいずれかを、授業担当者が設定できるようにした。学部によっては本学園の教職員全体に公開する授業はないところもあったが、積極的に公開してくれる学部もあり、多くの職員が授業を参観することができた。その結果として、職員による業務提案活動とも連携をし、次年度以降の職員による授業参観の取組につなげることができた。

コア科目の「学生による授業評価アンケート」は例年どおりに実施した。一方、アンケート内容の改訂についても検討を進めることができ、次年度から改訂版のアンケートを実施することができるようになった。

また、国内外の FD 活動に関わる情報収集も継続して実施し、複数の教職員をフォーラムやシンポジウムに派遣することができた。

<平成 22 年度>

4 月 19 日	私学高等教育研究所公開研究会「学士課程教育改革の現状と課題」 職員派遣
4 月 26 日	第 1 回大学 FD 委員会 開催
5 月 15 日	3 認証評価機関・日本学術会議共催シンポジウム「これからの大学教育の質保証のあり方—大学と評価機関の役割 大学側からみた質保証の課題」 職員派遣
5 月 17 日	第 2 回大学 FD 委員会 開催
5 月 21 日～23 日	THE TEACHING PROFESSOR CONFERENCE（米国マサチューセッツ州） 教員派遣
5 月 25 日	北里大学高等教育開発センター講演会「教育の質向上を目指して—3 つのポリシーの策定とその実現方策—」 職員派遣
5 月 26 日～28 日	初年次教育欧州会議（ベルギー アントワープ） 教員派遣
6 月 5 日・6 日	大学教育学会年次大会「大学の存在意義（レゾンデートル）」（愛媛 愛媛大学） 教職員派遣
6 月 7 日～10 日	初年次教育国際会議（米国ハワイ州） 教員派遣
6 月 18 日	科目担当者研修会 ワークショップ「ライティング指導法—よりよいレポートを書かせるために」 開催
6 月 19 日	大学入試センター入学者選抜研究機構・朝日新聞社教育事業センター 発足記念シンポジウム「これからの大学教育選抜の意味を問い直す」 職員派遣
6 月 22 日	USR特別セミナー「未来に社会的責任を果たせる大学の在り方を考える」 職員派遣
7 月 8 日	科目担当者研修会 ワークショップ「学生を評価する—学生の何をどう評価するか」 開催
7 月 12 日	進研アドシンポジウム「社会から求められる大学の人材養成とその教育力」 職員派遣
7 月 13 日	科目担当者研修会 「Blackboard システムを利用した補講の方法」 開催 （e エデュケーションセンター）
7 月 15 日	科目担当者研修会 「Blackboard システムを利用した補講の方法」 開催 （e エデュケーションセンター）
7 月 19 日	第 3 回大学 FD 委員会 開催
7 月 19 日～23 日	コア科目の「学生による授業評価アンケート」実施
7 月 27 日	科目担当者研修会 教員懇談会開催
8 月 18 日	科目担当者研修会 ワークショップ「カリキュラム・マップの作成」 開催
8 月 23 日	同志社大学主催 IR ワークショップ「IR 人材養成のために」 職

9月3日	員派遣 国立教育政策研究所高等教育開発セミナー「3つのポリシー(DP・CP・AP)をどう構築するのか?～学士課程教育の一貫性」 職員派遣
9月11日・12日	初年次教育学会年次大会(東京 高千穂大学) 教職員派遣
9月14日・15日	科目担当者研修会 「プレゼンテーション研修会」開催
9月20日	第4回大学FD委員会 開催
9月22日	科目担当者研修会 ワークショップ「授業計画書の作成」開催
9月29日	国立教育政策研究所国際セミナー&ワークショップ「新任教員研修プログラムの戦略的構築～英国のPGCHEの実際に学ぶ～」 職員派遣
9月30日	科目担当者研修会 ワークショップ「アクティブ・ラーニングの指導法—Afinity Grouping」開催
10月20日	科目担当者研修会 「Blackboardシステムを利用した補講の方法」開催 (eエデュケーションセンター)
10月25日	科目担当者研修会 ワークショップ「アクティブ・ラーニングの指導法—Afinity Grouping」開催
10月28日	科目担当者研修会 ワークショップ「授業計画書の作成」開催
11月8日	私学高等教育研究会主催公開研究会「私学における学士課程教育の組織的展開と就業力向上」 職員派遣
11月15日	第5回大学FD委員会 開催
11月18日	科目担当者研修会 「Blackboardシステムを利用した補講の方法」開催 (eエデュケーションセンター)
11月23日	国立教育政策研究所主催 FD 国際セミナー「大学を導く力をどう高めるか～アカデミック・リーダーシップの課題と展望～」 職員派遣
11月27日・28日	大学教育学会課題研究集会「キャリア形成における大学教育—ライフサイクルの視点から—」(兵庫 武庫川女子大学) 教員派遣
11月30日	科目担当者研修会 ワークショップ「授業デザイナー—シラバスの作成」開催
12月3日	大学コンソーシアム京都主催高大連携教育フォーラム「新しい時代に求められる能力をどう育成するか～高大接続テストの持つ意味～」 職員派遣
12月10日	科目担当者研修会 「Blackboardシステムを利用した補講の方法」開催 (eエデュケーションセンター)
12月13日	科目担当者研修会 ワークショップ「授業デザイナー—シラバスの作成」開催
12月19日	山形大学FDシンポジウム「学生主体型授業の冒険」 職員派遣
12月20日	地域科学 KKJ セミナー「ラーニングアウトカム評価の最前線」 職員派遣

12月20日	FD—マクロ・レベル—研修会 開催
1月12日	科目担当者研修会 ワークショップ「授業デザイン—シラバスの作成」開催
1月17日	第6回大学FD委員会 開催
1月17日～21日	コア科目の「学生による授業評価アンケート」実施
2月16日	大学FD委員会・大学院FD委員会主催 講演会「大学教員・大学院教員のFDとライフ・ステージ」開催
2月23日・24日	大学FD委員会主催 「平成23年度新任教員研修会」開催
2月24日・25日	科目担当者研修会 「プレゼンテーション研修会」開催
3月2日	同志社大学・北海道大学・大阪府立大学・甲南大学主催「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出—国公私立4大学IRネットワーク“IRシンポジウム”」 職員派遣
3月5日・6日	大学コンソーシアム京都主催 FDフォーラム「組織的FDの取り組み～FD義務化から現在（いま）～」 教職員派遣
3月7日	第7回大学FD委員会 開催

（５）活動の成果

科目担当者研修会については、多くを講演会のような受動的な取り組みではなくワークショップの形態で実施することで、教員各自の能動的な取り組みを目指した。また、同内容のワークショップを複数回開催することで、教員により多い受講機会を提供できたと同時に、少人数で開講することができ、その結果、受講した教員から積極性を引き出し、より高い成果を上げることができた。このことは受講後のアンケート（自由記述）からも確認できる。また、内容については、シラバス、成績評価、授業計画書、アクティブ・ラーニングなどを取り上げた。これらはいずれも、平成20年12月に出された中教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において今後の大学が取り組むべきこととしてあげられているものであり、ワークショップとして取り上げることで、その必要性を教員に示すことにもなった。

新たな取組として、eエデュケーションセンターとの共催により、研修会「Blackboardシステムを利用した補講の方法」を複数回開催することができた。eエデュケーションセンターが導入した録画とパワーポイント資料を同時に公開することのできるシステムを紹介することで、1回分の授業と同等の補講方法を教員に提案することができた。また、1回だけではあったが、教員懇談会を開催した。特にテーマを決めずに自由にディスカッションをする形をとったが、教員それぞれが抱えている思い、課題などに対して立場の異なる他者から意見を聞くことで、多様な見方ができるようになったという感想を聞くことができた。また、大学院FD委員会との共催により、東北大学の羽田貴史先生を講師に迎え、大学教員として教育活動と研究活動のバランスをどのようにとったらよいか、大学教員としてどのようなステップを重ねたらよいか、というお話を伺うことができた。今、大学教員はこれまで以上に研究業績を重ねると同時に、教育についても真摯に取り組み、業績を積むことが求められている。その点について、第1人者とも言える羽田先生のお話を伺うことで、今後の方向性を探る一助になった。

なお、科目担当者研修会においては、大学開講科目を担当している非常勤講師も全員を対象としている。他大学の事例を確認するとこうした研修会等では非常勤講師を対象外とするところも多く見られるが、本学ではこれまでのコア科目担当者研修会も同様、授業で学生と接するという点においては専任・非常勤の差はなく、学生にとっては等しく「担当の先生」であることから、本学の科目担当者研修会においては非常勤講師も受講対象としている。その結果、受講者の多様性が広がると同時に、非常勤講師の教育力向上にも貢献することができた。

プレゼンテーション研修会では、実施後のアンケートで多くの受講者がその有用性を高く評価していることが分かった。しかしながら、それはプレゼンテーション技術向上のために有用だということではなく、受講したことによって「気付くことができた」という点での評価だとみられる。こうした意識としての向上は技術面での向上よりも普遍性が高く、ただ受講した結果以上の成果があったと考えられる。

コア科目の「学生による授業評価アンケート」では、学生の直接の声を確認することができた。結果は科目担当者本人にのみフィードバックされており、翌学期の授業改善に役立っている。

また、他大学等で開催されるセミナーや研修会に参加することで、他大学の取組についての情報収集を図り、その内容を学内で報告し、情報の共有につながった。

しかしながら、3月11日の東日本大震災の影響により、年度末に計画をしていた研修会等が中止となったことは、大変に残念であった。特に、例年、年度末に開催をしていた「一年次セミナー」を担当する教員を対象とした研修会が中止となったことは、ちょうど教科書の改訂と時が重なり、「一年次セミナー」担当者の不安材料を取り除くことができなくなった。

（6）今後に向けて

本学では比較的早期からFD活動に取り組んでおり、次年度にはその多くが改善の時期をむかえると考えている。科目担当者研修会については今年度の内容を引き続き実施すると同時に、複数の新しい研修会等を開催したい。また、通常教育活動上のさまざまな問題を探し出し、それを解決するための研修会等も考えていく。例えば、災害に対して意識が向いている時でもあり、高等教育に携わる教員が災害に際してどのような行動をとるべきか、具体的なことではなく、概念的な研修会の開催を考えたい。また、発達障害学生（学習障害を含む）の対応の仕方など、今後の大学教育の大きな問題となるであろう課題についての研修会等も取り入れていきたい。

また、プレゼンテーション研修会については、全専任教員受講という当初の目標はほぼ達したと考えている。したがって、今後は当該年度の新任教員を対象に開催することとし、現職教員に対しては、プレゼンテーション研修会受講後のフォローアップ的な研修も考えていきたい。

コア科目の「学生による授業評価アンケート」については、今年度の大学FD委員会で継続的に検討し、次年度より改訂することができるようになった。アンケート導入から7年を経て、大学教育、授業の方向性も変わってきている。それに伴い、授業評価アンケートもその変化に対応していく必要があることはかねてより承知していたことであるが、い

よいよ新しい内容でのアンケートを実施することとなったことは、本学の FD 活動の大きな前進といってよいと考えている。

2. 学部の活動

平成 22 年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

	各学部 FD 委員会 の構成人数	各学部 FD 委員会 の開催回数	学生による授業評価の実施			学部研修会
			実施時期	専任 対象	公表	
文 学 部	7 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web)*1	学外実施
農 学 部	7 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web 予定)	学内実施
工 学 部	5 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	学内外 (Web)*2	学内実施
経営学部	7 名	5 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	—	学内実施
教育学部	9 名	2 回	春セメ終了後 秋セメ終了後	全員	—	学内実施
芸術学部	6 名	12 回	—*3	—	—	学内実施
リベラルアーツ 学部	6 名	2 回	秋セメ終了後	全員	—	学外実施

*1:文学部における学生による授業評価結果公表は、比較文化学科のみ実施している。

*2:学外には総括した内容、学内には全てを詳細に紙面と Web で公表している。

*3:授業評価の代替措置として授業成果報告書を作成した。

※コア科目についての学生による授業評価は別途実施している。

§ 文学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

今日、大学を取り巻く環境は大きく変化している。経済界や産業界をはじめ各界の価値観も多様化し、大学へのニーズも多岐にわたるようになった。一方、経済のグローバル化と未曾有の不況の影響を受け、学生たちは、将来を予測することが非常に難しくなり、不安定な状況におかれている。

かかる現状の認識の下、文学部では、一人ひとりの教員が常に、文学部および各学科独自の理念や教育目標をいかに実現するかという課題を念頭に置きながら職能成長できるような FD 活動を心がけている。そして、一部の教員のみが FD 活動を担うのではなく、全員が主体的に FD 活動に参加し、組織的な FD 活動を実現できるような体制を構築することを目標にしている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

文学部長、教務主任、学生主任、各学科主任（人間学科、国際言語文化学科・比較文化学科）、および、各学科 FD 委員を交え、文学部 FD 委員会を開催している。

加えて、各学科の学科会あるいは運営委員会等において定例的に FD 活動の企画・運営に関する事項の審議、学内外 FD 研修会の報告を行っている。

3 平成 22 年度の活動内容

(1) 文学部 FD 研修会

①概要（目的を含む）

大学を取り巻く環境の大きな変化とともに、文学部にも成績不振学生が存在する。彼らの成績不振が高校生の基礎学力に起因するものかを探るために、高校生の基礎学力の現状を把握することが目的である。

②到達目標

- ・ 高校生の基礎学力の現状を把握する。
- ・ 高校生の基礎学力の現状と文学部のディプロマ・ポリシーとの乖離を認識する。
- ・ その上で、文学部としての成績不振学生に対する対処方法を考案する。

③活動内容

(株)ナガセの平木正紀氏による全国の高校の教員へのインタビューに基づく高校生の基礎学力に関する分析結果の報告会を開催した。引き続き、文学部 FD 委員会メンバーによる質疑応答を行った。

④評価

文学部 FD 委員会メンバー全員(100%の参加率)が参加し、活発な質疑応答が繰り広げられ、具体的な対処方法も提案された。

(2) 学生による授業評価アンケート（比較文化学科のみ）

①概要（目的を含む）

比較文化学科専門科目群全科目について、授業評価アンケートを実施した。個々の教員が、担当する授業を改善するための指標とすることが目的である。

②到達目標

教員の意図と学生の受け止め方の間に差があるかどうかを検証し、次の学期あるいは次の年度の授業改善に具体的に生かす。

③活動内容

実施時期： 春・秋学期

対象科目： 春学期は学科導入科目群・発展科目群の全科目および専攻科目群のうち春学期のみ開講の科目 計 44 クラス

秋学期は学科専攻科目群の全科目および導入・発展科目群のうち秋学期のみ開講の科目 計 51 クラス

実施後の扱い： 集計は(株)教育ソフトウェアに委託する。教員には、授業ごとに集計結果および学生自由記述コメント用紙を返却する。個々の授業の結果は公表しないが、科目群ごとの結果は大学HP上で公開する。

④評価

「総合的に見て、この授業はいい授業だったと思う」という総合評価（5.0点満点）で、春学期は全体平均が 4.1、秋学期は 4.3 であった。

(3) 学外セミナー等への教員派遣

①概要（目的を含む）

他大学での FD 活動の取り組み方法やその成果報告を拝聴し、文学部の FD 活動に活かすために、学外セミナーに教員を派遣する。

②到達目標

2011 年 3 月 5～6 日に京都外語大学で行われる「第 16 回 FD フォーラム」（大学コンソーシアム京都主催）に文学部教員の 20%を派遣、2011 年 3 月 17～18 日京都大学で行われる「大学教育研究フォーラム」（京都大学高等教育研究開発推進センター主催、）に文学部教員 20%を派遣する。

③活動内容

2011 年 3 月 5～6 日に京都外語大学で行われた「第 16 回 FD フォーラム」（大学コンソーシアム京都主催）に比較文化学科教員 5 名、「平成 22 年度 FD のための情報技術講習会」（私立大学情報教育協会主催、3 月 10～12 日）に比較文化学科教員 1 名を派遣した。

2011 年 3 月 17～18 日京都大学で行われた「大学教育研究フォーラム」（京都大学高等教育研究開発推進センター主催、）に人間学科教員 3 名を派遣する予定であったが、3 月 11 日の東日本大震災に伴う諸事情により、派遣を中止した。

④評価

文学部の学外セミナー等への教員派遣は、東日本大震災の発生に伴う諸事情により、当初の目標であった20%を達成できず、15%に留まった。

「第16回FDフォーラム」に参加した比較文化学科教員5名は、第1日目に全員がシンポジウム「組織的FDの取り組み」に参加し、第2日目には2名がミニ・シンポジウム「グローバル化とこれからのキャリア教育」に、1名がミニ・シンポジウム「学生とともに進めるFD」に、2名が分科会「教育手法としてのe-Learningの可能性」に参加した。それぞれの企画ではFDの先進的な取り組みが紹介されており、各参加者はそれらを出張報告書で報告した。

(4) 授業改善のための公的試験活用（人間学科のみ）

①概要（目的を含む）

読み、書き、発表、議論といった基礎力を習得し、思考力を高めるという人間学科としての授業の取り組みを、公的な試験を利用し、学科を単位として評価することが目的である。

②到達目標

1年生から4年生までの全学生が公的な試験を受験する。

③活動内容

ベネッセと朝日新聞社が共同事業として開発した「語彙・読解力検定試験」の2010年5月から7月にわたり実施されたフィールドテストに協力校として参加し、人間学科全学年の学生が6月の3週目に受験した。加えて、1年生は、2010年11月に「語彙・読解力検定試験」2級のモニター試験を受験した。フィールドテストもモニター試験も受験料が無料であったため可能な活動であった。

④評価

春学期に実施した「語彙・読解力検定」のフィールドテストでの人間学科の学生全体の受験率は、90.53%と高かった。「語彙・読解力検定」は、語彙の意味を正確に読みとる力、語彙を適切に運用する力、および、ある程度の長さの文章の内容を正確に読みとる力（読解基礎力）を測定するものである。このテストは、計166大学（受験大学数）の学生37,408名（受験者の人数）が受験している。

本学科の受験者全体の平均正答率は、辞書語彙については43.9%（42.3%）、新聞語彙43.1%（40.8%）、読解51.8%（50.8%）であり、いずれにおいても、全受験者の成績と同程度であると考えられる（括弧内の数値は計166大学の全受験者の正答率を示す）。

本学科の学生の成績を学年間で比較すると、辞書語彙に関しては、1年生（平均正答率39.0%）に比べると2年生以上の学生（2年生45.0%、3年生45.0%、4年生47.6%）の平均正答率の方が高い。新聞語彙では、1年生（37.6%）と2年生（43.2%）、2年生と3年生（45.5%）の間で差があり、上級学年の方が成績がよかった。読解に関しては、1年生（38.1%）と2年生（55.3%）、および、3年生（55.4%）と4年生（60.9%）の間にそれぞれ平均正答率の差があり、上級学年の方が成績がよかった。以上の

結果から、全体的にみると、学年を追って成績がよくなっている傾向があり、学科としての授業の取り組みが、辞書語彙、新聞語彙、および、ある程度の長さの文章の内容を正確に読み取る力(読解基礎力)を向上させていると思われる。特に、読解に関して1年生と上級学年との間の差が大きいことから、さまざまな授業を通して思考力を高めるための学科としての取り組みが一定の成果を上げていると言えるだろう。

(5) ハラスメント防止講習会

①概要(目的を含む)

アカデミック・ハラスメントやセクシャル・ハラスメントなどのハラスメントを防止するために、ハラスメントの防止方法や適切な対応方法を理解する。

②到達目標

- ・ 学部教員全員の大学におけるハラスメントに対する危機意識を高める。
- ・ 学部教員全員の大学におけるハラスメントに対する理解を深める。

③活動内容

2011年1月27日14時～15時に、玉川学園顧問弁護士の桑島英美氏が文学部の教員に対しハラスメントの防止と対処について講演した。

④評価

多くの文学部教員が参加し、どのような行為がアカデミック・ハラスメントやセクシャル・ハラスメントになるのか、具体的な事例として理解した。

4 昨年度(平成21年度)に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案されていた、人間学科・比較文化学科ともに、基本的にはこれまでと同様の枠組みでFD活動が続けることは、22年度も十分に達成できた。

また、昨年度に挙げられていた二つの課題の一つである、学内のFD活動の機会をより多く設けることは、人間学科の公的試験を利用した学科単位としての授業評価の実施として達成できた。もう一方の課題である、学外で開催される各種FD研修会への積極的な参加は、東日本大震災に伴う諸事情により達成できなかった。

5 今後(平成23年度以降)の予定・課題について

人間学科

京都大学高等教育研究開発推進センター主催の「大学教育研究フォーラム」は、大学教育の実践的研究の成果を持ち寄り議論する場となっており、優れた高等教育実践の共有できる良い機会であるので、文学部としては今後も教員を派遣し続ける予定である。

公的試験を活用することは学科単位としての授業評価の優れた指標となることが明らかになったが、来年度からは「語彙・読解力検定試験」の受験料が有料となり、学科全学生の受験は難しい。学科単位の授業評価の優れた指標となるものを見つけ出すことが今後の課題である。

比較文化学科

大学コンソーシアム京都主催の「FD フォーラム」等への参加は、先進的な取り組みについて情報を得られ、各大学で FD 活動の推進役を務めておられる方々の貴重なお話を伺える機会であるので、今後も参加を続けたい。

比較文化学科の授業アンケートは、コア科目アンケートなど大学全体の動向を見ながら、内容と実施方法を検討していきたい。

S 農学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

大学 FD 委員会と協調しながら、各種研修会に積極的に参加する。また、専任教員および非常勤講師は原則学生による授業評価を実施する。学部内では、次項目の組織メンバーを中心に各教員との情報交換に努める。これらを通して、教員の教育技能向上に対する意識をさらに高め、技能開発を組織的に推進する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長（東岸）、生物資源学科主任（小野）、生物環境システム学科主任代理（杉本）、生命化学科主任（堀）、学生主任代理（水野）、教務主任代理（関川）および大学 FD 委員（富田）の計 7 名が中心となり、これにあたる。

3 平成 22 年度の活動内容

(1) 研修会

①概要（目的を含む）

「高等学校での化学と生物ならびに大学入試における化学と生物；(i)」 「大学におけるハラスメント；(ii)」をテーマとした研修会を実施した。いずれも講義や学生指導に活用することを目的とした。

(i) については、理科系受験者の高等学校での理科の学習状況や大学入試における理科受験の動向などを把握した。(ii) については、各種ハラスメントについてレクチャーを受け、その問題点などの理解に努めた。

②到達目標

いずれのテーマにおいても、現状を理解し講義や指導に活用する。

③活動内容

(i) については、高等学校から大学での理科教育ならびに大学入試での理科受験の動向などを話し合った。(ii) については、大学での各種ハラスメントのうち、とくに学生の関わる具体例などから現状を理解した。

④評価

各研修会の内容から学ぶものも多く、研修後には多くの意見や感想をいただき意見交換などが活発化した。

(2) 学生による授業評価アンケート

①概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部科目担当の全教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、授業評価アンケートを実施した。

②到達目標

現状を理解し、講義や指導に活用する。また、大学HP上に公開する。

③活動内容

春セメスター78 科目、秋セメスター66 科目に対して授業評価アンケートを実

施した。ただし、実験・実習科目、演習科目ならびに受講者が 10 名以下の科目については除外した。

アンケート集計後、結果を各教員に送付した。

④評価

結果に対する各教員の現状理解や講義などへの活用は進んだと思われるが、集計結果の公開は準備段階で終わってしまい、次年度への課題となった。

表. 平成 22 年度の授業評価アンケート集計結果（3 学科のアンケート実施科目すべて）

学期	設問	強く そう思う	やや そう思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	最頻値
春 学 期	1 授業には意欲的に取り組んだ	0.255	0.415	0.281	0.039	0.010	ややそう思う
	2 授業以外によく予習復習した	0.144	0.276	0.415	0.125	0.040	どちらとも言えない
	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	0.341	0.389	0.226	0.035	0.010	ややそう思う
	4 毎回よく授業の準備がされていた	0.384	0.371	0.215	0.024	0.007	強くそう思う
	5 シラバスにそって授業が行われた	0.319	0.369	0.281	0.024	0.007	ややそう思う
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	0.379	0.367	0.218	0.027	0.010	強くそう思う
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	0.376	0.314	0.223	0.062	0.026	強くそう思う
	8 授業中に学生の参加（質問・発言など）を促し、適切に対応した	0.301	0.331	0.297	0.054	0.016	ややそう思う
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	0.346	0.332	0.265	0.041	0.016	強くそう思う
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	0.378	0.338	0.231	0.039	0.014	強くそう思う
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	0.417	0.325	0.226	0.022	0.011	強くそう思う
	12 授業全体についてよく理解できた	0.233	0.374	0.299	0.069	0.025	ややそう思う
	13 授業の内容に興味をもてた	0.315	0.336	0.267	0.055	0.026	ややそう思う
	16 この授業を受講してよかったと思う	0.370	0.318	0.255	0.036	0.020	強くそう思う
秋 学 期	1 授業には意欲的に取り組んだ	0.233	0.404	0.303	0.047	0.014	ややそう思う
	2 授業以外によく予習復習した	0.151	0.244	0.423	0.144	0.038	どちらとも言えない
	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	0.317	0.404	0.234	0.035	0.010	ややそう思う
	4 毎回よく授業の準備がされていた	0.370	0.386	0.212	0.022	0.010	ややそう思う
	5 シラバスにそって授業が行われた	0.304	0.383	0.281	0.023	0.010	ややそう思う
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	0.383	0.362	0.213	0.032	0.010	強くそう思う
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	0.374	0.314	0.235	0.056	0.021	強くそう思う
	8 授業中に学生の参加（質問・発言など）を促し、適切に対応した	0.303	0.305	0.318	0.057	0.018	どちらとも言えない
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	0.327	0.338	0.278	0.043	0.014	ややそう思う
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	0.361	0.338	0.246	0.039	0.016	強くそう思う
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	0.410	0.330	0.226	0.024	0.010	強くそう思う
	12 授業全体についてよく理解できた	0.234	0.358	0.306	0.074	0.029	ややそう思う
	13 授業の内容に興味をもてた	0.310	0.323	0.274	0.060	0.034	ややそう思う
	16 この授業を受講してよかったと思う	0.362	0.314	0.255	0.041	0.028	強くそう思う

（3）教職員を対象とした公開授業

①概要（目的を含む）

教員の教育力向上のために、教員相互の授業参観を実施した。

②到達目標

この活動の実施意義を理解する。

③活動内容

教員相互の授業参観を実施し、全学職員にも授業を公開した。

④評価

農学部としては初めての活動であり、実施方法や活動後の活用など検討の余地が多いが、5 名の教員が授業を全学教職員に公開したことは評価したい。

4 昨年度（平成 21 年度）に提案された予定・課題の達成度について

授業評価アンケートの集計結果を公開するまでには至らなかったが、公開する範囲やアンケートの学生自由記載欄の有効活用など意見交換は活発化した。また、化学における基礎学力を把握するために生命化学科 1 年生を対象に高等学校での学習範囲について試験を実施した。これにより、基礎学力不足の学生には基礎的な科目の受講を推奨した。

実施を予定していた課題などで著しい進展を示せなかったものもある。しかし、次年度以降に継続することで従来の FD 活動の充実と発展を目指したい。

5 今後（平成 23 年度以降）の予定・課題について

- ・ 授業評価アンケートの実施と授業への還元方法の検討
- ・ 授業評価アンケートの集計結果の分析ならびに公開
- ・ 各種研修会（学内、学外）への参加
- ・ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み
- ・ 基礎学力不足の学生に対する対応
- ・ 大学院 FD 委員会との協調

§ 工学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

工学部全教員が 2020VISION を共有して、「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。

現状における課題への対応を充実させる。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

平成 20 年度末までは工学部 FD 活動の多くは ISO9001 教育マネジメントシステムの活動によるものだったが、平成 21・22 年度は、マネジメントサイエンス学科およびソフトウェアサイエンス学科の 2 学科は ISO9001 のシステムの運用を維持した。一方、機械情報システム学科は平成 21 年度より学科の状況に適した PDCA のサイクルを運用している。また、ソフトウェアサイエンス学科は今年度末に ISO9001 の活動を終了し、平成 23 年度からはこれまでの活動経験を活かした学科にふさわしい PDCA のサイクルを運用することになった。

学部としては ISO の活動の有無にかかわらず、FD 活動は学生による授業評価アンケート、教員による授業改善計画・実行・点検、授業参観など、授業評価総合検討会および主任会、教務担当者会で運営している。今期から、2020 年 VISION に沿う工学部教育の在り方をこれらの組織および教授会にて検討を開始した。なお、全専任教員参加による工学部 FD 研修会を年 1 回開催している。

3 平成 22 年度の活動内容

(1) 工学部 FD 研修会

①概要（目的を含む）

平成 23 年 1 月 13 日（木）17 時～18 時 30 分

学士課程における 2020VISION の共有による FD 活動の実施

②到達目標

工学部全教員が 2020VISION を共有して、「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかることができるようになる。現状における課題への対応を充実させることができるようになる。

③活動内容

「学士課程における 2020VISION」にある以下の項目について、工学部の今後に向けた施策を検討した。

- 授業の健全運営と適正化
- 単位の実質化と教育の質保証
- 学習プロセス評価の重視と授業運営
- 問題解決型授業（PBL）の導入
- 教職に関する科目を 124 単位内に含めた教職コースの開設

④評価

工学部全教員が2020VISIONの共有と実現へ向けたカリキュラムの改定における目標・要件を確認・共有し、改定作業を開始することができた。学科専門科目の総単位数の目標を149単位に設定して、大幅に開講科目総単位数を減じ、充実した指導が確保されたカリキュラム構成を目指すことを共通認識として持つことができた。なお、本研修会には約8割の教員が出席し、出張等で欠席した教員には資料配布およびカリキュラム改定作業着手時における確認によって、検討内容の認識と共有をはかった。

(2) 学生による授業評価アンケート

①概要（目的を含む）

工学部では授業内容・方法・スキルの向上等、継続的な授業改善をはかるために、平成12年度秋学期より継続して「学生による授業評価アンケート」を実施している。

②到達目標

工学部各学科の全教員全科目について実施し、継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。学科および学部の授業評価検討会における評価検討を通じた授業改善、カリキュラムの変更・改定に役立てる。

③活動内容

学期末最終授業または期末試験期間に実施し、集計結果は科目ごとのデータおよび全体集計データとともに科目担当に届けられる。集計結果の内容は科目担当者が作成した授業チェックシートとともに科目単位および学科単位で次期の授業に反映されるよう、PDCAを実行する努力をしている。学外には総括した内容をWebで、学内には全ての詳細を学生による授業評価報告書として校舎ロビー等で閲覧公開している。公開する報告書に掲載されている科目ごとの集計表には可能な範囲で科目担当者のコメントを記載するようにしている。

④評価

教員、科目とも参加率はほぼ100%を維持できている。授業評価平均値は3.7前後を維持している。集計結果に対する科目担当者のコメント記載については多くの科目担当者が入力し、記載できるよう努力したい。

(3) 授業評価検討会

①概要（目的を含む）

学生による授業評価アンケートとともに教員自ら授業を評価する科目ごとの「授業チェックシート」を基にして、学科ごとに実施した「授業評価検討会」の報告を持ち寄って、学部として実施する「授業評価検討会」にて、総合的に検討を加える。検討結果は学部としての改善の実施、および各学科へフィードバックされ、学科における改善の実施に寄与する。

②到達目標

継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。

改善成果を評価する。学科として今後必要な改善点を確認するとともに、学部として必要な改善点を提言する。

③活動内容

授業評価検討会実施日：春学期 9 月 10 日、秋学期 3 月 30 日

④評価

評価の平均値は比較的高い水準を維持しているが、中には低い科目もあり、個別にその原因を調査し、必要であれば改善を進めたい。難しい内容の科目の評価が低い傾向があり、一方では、同一科目でも、担当している教員によって評価が異なる場合があることが分かった。授業評価アンケートの評価平均値は(2)の④に記した水準であるのに対して、特定の学科ではほとんどの科目の値がこの平均値を大きく上回っていることがわかった。今後のために、これまでの経過を分析することにした。

(4) 学習支援

①概要（目的を含む）

主に 1 年生を対象とする基礎学力向上のために実施している数学・物理学の「学習支援」は、開始 3 年目を迎え、活用した学生の単位取得率が高い等の効果は表れているが、活用率を向上させることが課題となっている。

②到達目標

- ・活用率の向上
- ・支援の充実

③活動内容

数学では教科科目の小テスト不合格者指導および再テスト実施と評価の連携を推進した。物理学では同時に指導する対象学生数を個別指導可能な範囲に限定し、実施日時限をクラス別に設定した。物理学の学習支援については例年応用物理学会にて実施効果を含めて報告されている。

④評価

昨年に比し活用率は向上しており、教科科目との連携強化によって充実度は増している。

(5) 発達障害学生支援

①概要（目的を含む）

発達障害あるいは発達障害とみられる学生の入学事例が毎年みられ、対応を模索しながらの支援・指導は 2 年を経過した。

②到達目標

当該学生の就労や将来を意識した支援・指導の在り方の目処を立てる。

③活動内容

- ・実験実技科目を中心に指導補助員を充当し、対応している。
- ・学科専門科目については科目担当者に理解を求め、指導上の配慮をお願いしている。
- ・対象学生の状況に応じて学内の特別支援教育専門家や健康院カウンセラーの助言を得て支援・指導を実施している。
- ・発達障害学生支援を先行して実施している他大学の例を参考に本学の学習環境・制度を考慮して指導方針をたてている。
- ・学生本人はもとより親御さんとのコミュニケーションを良好に保ち、情報を共有している。
- ・本人の就労や将来を考慮した指導を行っている。
- ・診断を受けていない場合は、診断を勧めている。

④評価

対象となる学生の進級や新入学による指導実績の増加とともに、かかわる教員の外部研修等によって、指導の在り方に目処が立ちつつある。

(6) 学外セミナー・現況調査等への教員派遣

①概要（目的を含む）

現状における課題あるいは今後のカリキュラム改定にかかわる課題に関する知見を得るため、学外のシンポジウムや研修会に参加して、その内容を活用する。

②到達目標

参加した研修等の内容を活用する。

③活動内容

- 平成 22 年度工学教育連合講演会（主催：日本工学教育協会、会場：東北大学川内北キャンパス、開催日：平成 22 年 8 月 19 日）
- 発達障害者メンター養成講座 第 1 回（主催：NPO みやぎ発達障害者サポートネット、会場：宮城県建設産業会館、開催日：平成 22 年 8 月 28 日）
- 明星大学における発達障害学生指導の現況調査（調査先および訪問日：学生サポートセンター 平成 22 年 10 月 25 日、情報学部 平成 22 年 12 月 3 日）
- PBL 教育における多面的評価（シンポジウム）（主催・会場：同志社大学、開催日：平成 23 年 2 月 26 日）
- 金沢工業大学夢考房プロジェクト発表会（主催・会場：金沢工業大学）、開催日：平成 23 年 3 月 4 日）
- FD フォーラム（主催：京都大学コンソーシアム、会場：京都外国語大学、開催日：平成 23 年 3 月 5 日）

④評価

例年、工学部 FD 研修会にて参加報告を実施しているが、今年度の工学部 FD 研修会では 2020VISION に主題を限定したため、まとまった報告の機会がなかった。このため、必要に応じて、学科会における報告や個別の報告、回覧等に

より、発達障害学生支援やカリキュラム改定に活用されている。

(7) 学内研修会等への教員参加

①概要（目的を含む）

学部の授業の健全運営と質の向上のためには個々の教員の授業力によるところが大きい。このため学部の教員が学内の研修会に参加して、資質や授業力の向上をはかることが望ましい。

②到達目標

参加した研修等の内容を活用する。

③活動内容

研修会名・開催日・工学部教員の参加者数（非常勤を含む）は次の通り。

○ライティング指導法 - よりよいレポートを書かせるために（6月18日）1名

○学生を評価する－学生の何をどう評価するか（7月8日）2名

○教員懇談会（7月27日）2名

○カリキュラム・マップの作成（8月18日）7名

○アクティブ・ラーニングの指導法－Affinity Grouping（9月30日）1名

○Blackboard システムを利用した補講の方法（10月20日・12月10日）計4名

○授業計画書の作成（10月28日）1名

○授業デザイン－シラバスの作成（11月30日・1月12日）計2名

○大学教員・大学院教員のFDとライフ・ステージ（2月16日）8名

○プレゼンテーション研修会（2月24・25日）1名

④評価

個々の教員の授業力および資質の向上をもたらし、授業の健全運営と質の向上に寄与しているものと推察される。

4 昨年度（平成21年度）に提案された予定・課題の達成度について

(1) 基礎学力の向上

数学および物理に関する学習支援については、対象授業の成績に反映される仕組みを適用するなどの対策によって、昨年度一部低迷した学生の活用度が向上している。さらに、「高校レベルの内容を復習する」より「大学の授業に沿って支援する」ことが適切であることもあらためて認識された。

(2) 特別学習指導（発達障害学生の指導）

2年間の指導実績とともに、かかわる教員の外部研修等によって、指導の在り方に目処が立ちつつある。

(3) 教育活動のPDCAサイクルによる改善活動

学部としては授業評価総合検討会によって改善活動が維持されている。ISO9001を継続している学科の改善活動は十分維持されている。ISOの活動を打ち切った学科は改善活動は維持されているものの、授業チェックシート記載等における課題がある。

(4) FD 活動の在り方の検討

授業参観（研究授業）の参観者数が毎回 1 から 3 名程度であり、低迷している。対象となった科目担当にとっては参観者のある限り、改善に有益であるものの、組織としての効果的な授業手法等の共有の観点からは望ましい状況ではない。今年度から、全学一斉に、参観者が全学部教員および職員を対象とする参観授業も設定されたが、今年度は工学部参観授業への学部外からの参観者は得られなかった。時間をとることが難しいという声も多い。

5 今後（平成 23 年度以降）の予定・課題について

(1) 2020VISION の実現へ向けた課題

カリキュラムの改定を実施する。改定では学科専門科目の総単位数の目標を 149 単位に設定して、大幅に開講科目総単位数を減じ、充実した指導が確保されたカリキュラム構成を目指す。

(2) 現状における課題

入学生の学力不足対応、発達障害者支援等の充実化が挙げられる。

(3) FD 活動の在り方に関する課題

現状では参観授業（研究授業）の参観者は少なく、実施にあたって工夫が必要となっている。

§ 経営学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

- (1) 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。
- (2) 玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。
- (3) 21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部一少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。
- (4) 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、国際経営学科主任、観光経営学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当教員が中心となって 2 学科合同の FD 活動を実施する。FD 担当と大学 FD 委員会委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として FD 担当が研修会・ワークショップの運営にあたる。

3 平成 22 年度の活動内容

(1) 大学コンソーシアム京都主催 第 15 回 FD フォーラム参加報告①

①概要（目的を含む）

予習復習の手段としてオンライン学習のさまざまな活用方法を取り上げ、「24 時間の教育」に遠隔教育を活用するためのアイディアを得ることを目的として研修会を実施している。

②到達目標

オンライン学習を授業に取り入れる具体的な方法を提案し、Blackboard のより効果的な利用方法について検討する。

③活動内容

稲垣明博教授からのオンライン学習に関するシンポジウムの報告に基づいて、他大学における取り組み、問題及び改善案を共有した。

④評価

Blackboard のさらなる有効活用、対面授業と遠隔授業の併用等、授業における活用方法を深く議論できた。

(2) 大学コンソーシアム京都主催 第 15 回 FD フォーラム参加報告②

①概要（目的を含む）

学部・学科におけるキャリア教育の進め方を示し、授業における講義の効果を見直すことを目的として研修会を実施している。

②到達目標

専門分野と経営学部におけるキャリア教育を関係づけるとともに、講義形式による授業展開の特長を共有する。

③活動内容

島義夫教授からの他大学におけるキャリア教育の取り組みに関する報告に基づいて、いかに学生を勉学に向かわせるか、専門分野と実社会のつながりを学生にどのように伝えるかを議論した。またフォーラムで取り上げられた「講義の復権」に関する報告では、効率性・確実性のある講義形式の授業の意義、講義の技法について検討した。

④評価

講義、演習等、各授業の進め方とその狙いの関係をより明確にして授業を設計する意義を共有した。

(3) 国内・国外研修派遣（教育研修）報告

①概要（目的を含む）

アジア・大洋州の大学における FD 活動の状況を知ることが目的として実施している。

②到達目標

アジア・大洋州の大学における FD 活動を大まかに整理し、経営学部の FD 活動とアジア・大洋州の大学における FD 活動を比較・検討する。

③活動内容

古島義雄教授による研修先大学の授業の進め方、留学生の受け入れ状況、ビジネススクールの現状に関する報告に基づいて、経営学部において FD 活動に取り込む要素を検討した。

④評価

留学による語学研修及びアジア・大洋州のビジネススクールの現状を共有した。

(4) 講演会

①概要（目的を含む）

海外の事例を参考に、FD 活動を推進する新たな知見を得ることを目的として実施している。

②到達目標

アメリカにおける大学教育、学生・教員の取り組みについて現状と課題を知る。

③活動内容

アメリカ・デュポー大学 (Depauw University) のクリストファー・ボンデュー准教授を講師に迎え、学外における取り組みを含めた学生への期待、教員の責務、授業内容と評価、アメリカの大学が直面する問題等について、さまざまなデータを交えて御講演いただいた。

④評価

活発な質疑応答があった。アメリカの大学教育の抱える問題を知るとともに、経営学部における FD 活動をさらに推進するための課題を検討した。

(5) ハラスメント防止研修会

①概要（目的を含む）

大学におけるハラスメント防止を目的に実施している。

②到達目標

ハラスメントのない環境の整備を一層推進するために、ハラスメントがもたらす影響について理解をさらに深める。

③活動内容

桑島英美弁護士を講師に迎え、大学におけるハラスメントの事例、問題点、ハラスメントを防止するための方法、ハラスメントへの対応について御講演いただいた。

④評価

学生指導の方法などの具体的な質疑応答によってハラスメント防止への意識が高まった。

(6) 学生による授業評価

①概要（目的を含む）

各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として、春学期、秋学期ともに実施している。

②到達目標

学生の学習状況を把握するとともに、各教員のさらなる資質向上を図る。

③活動内容

独自の方法で実施している科目及び演習科目を除くすべての科目でマーク形式、記述形式の授業評価アンケートを実施した。

④評価

FD 担当教員よりマーク形式のアンケート結果を各科目担当教員に配付し、各教員の FD 活動に活用するよう継続的に呼び掛けている。

4 昨年度（平成 21 年度）に提案された予定・課題の達成度について

平成 21 年度に予定していた今年度の取り組みは各活動で成果をあげることができた。他にも次のような FD 活動を実施している。

各種推薦入試による入学予定者を対象として、2 月に入学前英語レベルチェック試験及び入学前ガイダンスを実施した。出席者は国際経営学科 83 名（出席率 71%）、観光経営学科 45 名（同 59%）であった。英語レベルチェック試験は今年度からの取り組みであるが、入学前の英語力を把握するとともに英語力の重要性を伝え、さらに学生生活を紹介することで、初年次教育等の入学後の教育活動をより充実させることができると考えている。

全学的な取り組みの一環として、経営学部教員が担当する 7 科目で授業参観を実施した。教材、授業の方法、学生の取り組みに加えて、設備や受講者数といった環境など、さまざまな視点から授業改善への提案が見られた。

さらに 2 月のプレゼンテーション研修会、3 月に京都外国語大学で開催された第

16回FDフォーラム(大学コンソーシアム京都主催)に、それぞれ1名が参加した。
FDフォーラムについては平成23年度の研修会で報告を予定している。

5 今後(平成23年度以降)の予定・課題について

FD活動への取り組み理念・目標のもとで、これまでと同じように授業内容・方法に関する研究、学部・大学院一貫教育に関する研究、研修会への参加推進などの諸活動を継続する。さらにFDに関する組織的な対応として、平成23年度から「TAMAGAWA VISION 2020」に沿って経営学部のカリキュラムをはじめとする教育システムの見直しを進める。経営学部の2020ビジョン策定、初年次教育のあり方について、それぞれワーキンググループを設置して各グループで月1～2回検討する場を設け、その結果を教授会で報告する。

§ 教育学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

本年度の FD 活動への取り組み理念・目標は、平成 21 年度の内容を継続し、以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指している。指導に当たる教員は自らの資質と能力を向上させ、社会に貢献できる人材育成を行うことを通して、大学・学部の競争優位性を高めることが教育学部 FD 活動の目標である。」

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

教育学部長、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、教務担当及び FD 委員（教務担当兼務）の 9 名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD 委員会が学部における FD 活動の計画策定、企画・運営にかかわる検討、FD 活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また、委員会決定事項を教授会への議案提起を行い、FD 活動の推進を進めている。

3 平成 22 年度の活動内容

（１）学生による授業評価（リフレクションシート）の実施

①概要（目的を含む）

学生による授業評価の実施促進を図るとともに、実施後の活用方法を検討する。具体的には実施後の集計を外部委託し、さまざまな分析が可能なデータの集積を進める。

②到達目標

- ・専任教員が担当する授業においては講義科目を中心に学生による授業評価（リフレクションシート）を積極的に実施する。
- ・実施した授業評価の集計を外部委託し、データ分析と集積を試み、教員の授業改善につなげる。

③活動内容

- ・学生による授業評価の実施とその報告。
- ・授業評価のデータ集積の報告と使用方法例示のための研修会実施。

④評価

- ・授業評価実施の報告は春学期が 50%、秋学期は 78.5%であった。教育学部科目におけるアンケート実施報告件数は、春学期、秋学期合わせて 142 件であった。
- ・授業評価の集計を外部委託した教員の割合は、春学期は 17%、秋学期は 24%であった。アンケート集計外部委託件数は、春学期、秋学期合わせて 40 件であった。
- ・分析データを研修会にて報告、偏りの大きなデータであるが、分析例を示し、学生の動向を明らかにした。データ母体の偏りにより、統計的な手法による分

析、検討は比較できないにしても、学年による学びの違いがあるなど、いくつかの傾向が導き出され共通の関心事項とすることができた。

詳細は、以下（２）に示す。

（２）教員研修会の実施

①概要（目的を含む）

学生による授業評価の是非とその結果の運用の方法、内容や形式の改善をテーマにした研修を企画、運営する。

②到達目標

春学期、秋学期の集計結果をもとに各１回、学生による授業評価に関する研修会を実施する。

③活動内容

平成 22 年 11 月に春学期の集計結果をもとにした研修会を実施、秋学期の集計をもとにした研修は震災のため 23 年度の春学期に延期となった。

④評価

- ・ 11 月の研修会は、教授会と連動させて実施したため、前任教職員のほぼ全員が参加した。
- ・ 集計を外部委託した場合のデータ集積結果の表示方法と集積の意義について共通認識をもつことができた。
- ・ 限られたデータからの分析であるが、学生の学びへの問題意識、興味・関心などを垣間見ることができた。また、学年による意識の違いなども窺われ、今後のデータ集積の必要性が確認された。
- ・ コア科目の授業評価シートの改定に伴い、学部内の教科目にとどまらず、授業評価の可用性と限界、評価項目などを討議する機会ともなった。

（３）教員相互の授業参観

①概要（目的を含む）

教員相互の授業参観を実施し、各自の教授法、教授内容についての振り返りを行い、授業改善につなげる。また、関連する教科目の教授内容の調整を検討する機会とする。

②到達目標

- ・ 全学 FD 委員会の提案に合わせて、5 人の教員が授業参観を行う。
- ・ 学部内でも自由に授業参観を行うための土壌を整える。
- ・ 複数担当制の教科目では、常に FD を意識し、相互の研鑽を図る。
- ・ 一年次セミナー101、102、キャリア演習Ⅰ・Ⅱについての教授内容を検討する会議を 23 年度以降、学部の FD 活動として展開する準備を行う。

③活動内容

- ・ 教育学科教員 3 名、乳幼児発達学科 2 名の教員の授業参観を実施。
- ・ 一年次セミナー101・102、キャリア演習Ⅰ・Ⅱの担当者会議を隔月 1 回の割合で実施。

④評価

5教科の授業参観に教育学部の教員5名、高等部の教員が2名、職員14名（実施回数の延べ人数）が参加した。以下、授業参観実施後のディスカッション、コメントシート、教員への聞き取りから得た情報を示す。

<授業を公開した教員のコメント>

- ・授業評価を全教職員に開き行うことで、職員の方と授業形態に沿った教育環境の見直しをすることができ、有意義であった。
- ・教授者と学生の双方向的な授業の展開を講義の中に取り入れる授業を展開しているが、教授することと話し合いの時間配分が課題となっている。今回も時間配分の質問があり、自己課題と再確認できた。

<授業を参観した教員のコメント>

- ・授業の中で実際に小学校での授業を教授者が再現し、その中から学びのポイントをくくり出すという展開がなされていて、学生自身の実践的に学ぶ喜びを感じているようにとらえられ、自らの授業に生かそうと考えた。
- ・学生のコメントカードを巡っての丁寧なやりとり、ディスカッション後のやりとりを通して、自分自身もより丁寧に学生とやり取りをしていかななくてはならないことを学んだ。
- ・教員とのやりとり、学生同士の話し合いを通して、学生が深く考えながら成長している様子が窺われた。自分のコメントカードの使用について再考したいと考えた。
- ・毎回の授業での自己の学びをまとめ、学生同士で評価し合うというペーパーを用いたことで、学習の意欲を高め、学習内容の定着も図られ、参考にしたいと考えた。
- ・保育実践のエピソードで学生をひきつけて授業を展開するなどの工夫は参考にしたい。
- ・保育士が保護者支援をしなくてはならない実態も理解し、改めて保育士の職域を考えさせられた。
- ・学生が存在感を認識できる授業の展開であった。

<授業を参観した職員からのコメント>

- ・自分が学生時代に受けていた授業では、意見をコメントカードに書く、それを用いて話を聞く、発言するということがなかったので興味深く参観した。
- ・保育実践の話は興味深かった。保育士の一つ一つの行為に願いが託されていることを知る機会になった。実践に学ぶということの意味を学生は理解しているのではないかと考えた。

（４）外部機関主催の研修参加

①概要（目的を含む）

教育学部のFD活動の促進を図るため、外部機関が開催する研修会、フォーラムに参加し、外部の動向を把握する。また、外部動向については教員研修会、教授会などで報告し、共通理解を深める。

②到達目標

公益財団法人 大学コンソーシアム京都主催 「第 16 回 FD フォーラム」、または、京都大学高等教育研究開発推進センター 第 17 回「大学教育研究フォーラム」に参加。

③活動内容

平成 23 年 3 月 5 日（土）・6 日（日）に京都外国語大学にて実施された公益財団法人 大学コンソーシアム京都主催 第 16 回 FD フォーラム「組織的 FD の取り組み ～FD 義務化から現在（いま）～」に学部 FD 委員である宮崎が参加した。

④評価

分科会にて、他大学の学生による授業改善の取り組みについて情報の収集をした。

- ・アンケートによる授業評価と改善への取り組みについてはその限界を感じながらも、質問項目を精査、検討に取り組んでいる。また、一律の形式では評価しきれない実態があるので、講義・演習・実技・語学などに分けたアンケートを作成する工夫を始めているとのことであった。
- ・アンケートの回収率を高める工夫として、携帯からアクセスし、評価できるシステムの構築を研究している団体もあるとのことであった。
- ・アンケートによる評価以外の授業改善（コメントカード、ミニッツペーパー形式の採用）のための取り組みを模索し始めている。
- ・学生の授業評価の公開は主として、WEB や冊子にて慎重に行っている。但し、教職員の健康維持、労働条件の維持、プライバシーの尊重などには細心の配慮をかさねて行っているのが現状である。

4 昨年度（平成 21 年度）に提案された予定・課題の達成度について

＜学生による授業評価（リフレクションシート）のマークシート化について＞

学生による授業評価のマークシート作成に当たっては、シート 1 枚のコストがかなりかかることが想定されたこと、また、コア科目のアンケート項目の改定と全学共通化の検討時期が重なったことから、実施を先送りにし、従来の形式を踏襲した。ただし、アンケートの集計方法については、現状のシートを活用して外部委託することとした。集計の結果を共通スタイルでの可視化が可能で、今後の FD 活動の活性化が図られる可能性があることから、任意での外部委託を呼び掛けた。これまで教員各自が集計をしていたが、少数であるが外部委託の実績を積むことができた。

＜教員相互の授業参観の実施について＞

全学部での共通展開になったことも相まって、教員間での参観が一步前進した。また、授業参観後に参観した教職員とのディスカッションも進み、授業改善への新しい方法が具体的に模索され始めた。

＜キャリア演習Ⅰ・Ⅱの教授内容の構築＞

学生のコミュニケーション能力の向上、早期からのキャリア意識の形成を図るこ

とを目的に展開される本授業において、より良い教授内容が展開されるよう、担当者間での検討会議を定例化し、検討を重ねた。特にコミュニケーション能力の向上にあたっては、9月の月上旬に実施する宿泊研修の内容とそれを核にした授業内容の展開について慎重に審議を重ね、新しい内容を創造した。また、キャリア形成については、本学部の卒業生を講師として招き、具体的にキャリアが描けるよう、少人数で時間をかけてディスカッションができるように改善を重ねた。

<教育現場、保育・福祉現場との交叉>

教育現場、保育・福祉現場との情報共通のための交叉は、本学部の使命と強い関連があり、毎年工夫を重ねている。教育実習および保育実習時の訪問指導における交叉に限らず、学部独自の研究会を企画し、校長、施設長等の出席を得て、交流を深めている。

5 今後（平成23年度以降）の予定・課題について

本学部の教員一人ひとりが大学の公共的役割や社会的責任の自覚を高め、学部の知的資産（知識・方法）の活用についての模索を重ねる。同時に、その発展・更新をも図るものとする。また、本学部の使命である、教育・保育専門職業人の養成、幅広い職業人養成及び生涯学習機能や社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流）などの役割を担える人材輩出のための研究と教育実践を促進する。本学の建学の理念に基づくも、今日の社会の要求に応じることのできる学部の形成をめざし、さらなる努力を重ねたFD活動を推進する。具体的な取り組みは以下の通りである。

- ・ 学生による授業評価(リフレクションシート)の実施についてさらなる促進を図るとともに、実施後の活用方法（授業改善への結びつけ方など）を検討する。
- ・ 学生による授業評価（リフレクションシート）の実施後は、集計を外部委託することに努め、学部としてさまざまな分析が可能なデータ集積を進める。
- ・ 学生による授業評価（リフレクションシート）の公表の方法について検討を重ねる。
- ・ 学生における授業評価（リフレクションシート）以外の授業改善の方法を模索する。
- ・ FDにかかわる教員研修会を実施し、学部の新たなFD課題を明確にする。
- ・ 複数担当授業、学部で共通に取り組む授業の会議（一年次セミナー101・102、キャリア演習Ⅰ・Ⅱ）をFD活動の一環に位置付け、教育内容のさらなる充実を図る。

§ 芸術学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

- ・芸術学部のミッション「芸術による社会貢献」の意図を全ての教員が理解し、それを実践する人材育成を行うための方策を探求する。
- ・3 学科それぞれの特性を反映した独自のカリキュラムに加え、学科を越えた教育連携の実現を意識したカリキュラムを併せて設定する。これによって「社会貢献」に対する幅広く有意義な体験の機会を持たせる。
- ・「芸術による社会貢献」達成のための具体策として、学生が多様な職業に対する関心と理解と深めるようなキャリア教育の充実を図る。そのためにキャリアセンターとの連携を強化し、就職説明会および各種試験などの企画を進める。こうした教育プログラムを進めるため、各担任が連絡を密にし、問題意識を共有できるよう、教員研修を行う。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心に主任会のメンバーがこれにあたる。毎月の主任会と主任研修会で活動目標とその達成手段を検討し、随時その成果及び新たな方策等を拡大教授会で報告する。大学 FD 委員は他学部・他大学における FD 活動の情報収集を行い、拡大教授会において報告する。

3 平成 22 年度の活動内容

(1) 講演会の開催(1) ハラスメント防止について

①概要（目的を含む）

現在取り上げられるハラスメント全般と、その防止策及び対応の仕方について学ぶ。

②到達目標

芸術学部専任教員全員がハラスメントに対する認識を深め、対応の仕方を理解することを目標とする。

③活動内容

下記の日程でハラスメント防止及び対応に関する研修を行った。

実施日：平成 22 年 4 月 22 日（木）17 時 00 分～17 時 50 分

場所：大学研究室棟 B104 会議室

講師：玉川学園顧問弁護士・桑島英美氏

④評価

4 月の拡大教授会終了後に行われ、海外出張中の教員を除く専任教員全員が参加した。その結果、ハラスメントに対する現状認識が深まり、問題は一切生じなかった。ハラスメントの種類や対応方法に関する共通の理解が得られた結果であると評価できる。

(2) 講演会の開催(2)－教員のFDに係わる授業成果向上を目的とする

授業成果報告会・公開講座

①概要（目的を含む）

芸術学部の授業成果向上（質の保証を見据えて）を目的とした公開講座・講演会を行う。これによって本学部の教員による新たな教育プログラムのあり方を議論し、教務力の向上を促す。

②到達目標

玉川大学芸術学部の教育目標を達成することを目的とした教員の教師力向上のための啓発を目標とする。

③活動内容

下記の日程で講演会を開催した。

実施時期：11月6日～11月7日（コスモス祭芸術学部講演会として）

司 会：玉川大学芸術学部 加藤悦子・林卓行

特別講師：美術史家・元ブリヂストン美術館副館長 宮崎克己氏

京都精華大学准教授 津堅信之氏

武蔵野美術大学等非常勤講師 伊藤恵夫氏

講 師：玉川大学芸術学部 梶原新三・三井秀樹・中村慎一・小倉康之

④評価

本学および他大学の教員、高等学校の教員、学生およびその家族など約150名が参加した。本学芸術学部が推進しているジャポニスム研究をどのようなかたちで教育に活かしていくのかについて、シンポジウムを通じて問題意識を共有することができた。また、「理論と実践」をテーマとした新しい授業形態について相互理解を深め、今後の議論の礎を築くことができた。講演会アンケートには、高校の美術教員や受験生から「充実した内容だった。」といった好意的な内容のコメントが多くみられた。

(3) 授業成果報告書の作成

①概要・活動内容（目的を含む）

平成22年度は学生による授業評価アンケートの実施を見送り、代替措置として、各学科の基幹科目の担当者が授業概要と授業成果をまとめ、授業成果報告書を作成し、提出する。

②到達目標

基幹科目担当者がそれぞれの授業内容と学習効果について再考し、授業改善を図る。また、全ての教員が基幹科目の概要を把握することによって、より綿密な教育連携を可能とする。

③評価

本年度は基礎実技や一年次必修の各学科「概論」、三年次必修の「研究」など、芸術学部全体の教育に関わる基幹科目に関して、情報を共有し、今後の教育方針に関する議論の土台を築くことができた。

(4) 学外セミナー等への教員派遣

①概要（目的を含む）

第 47 回全国高等学校美術・工芸研究大会への教員派遣。高等学校教諭との交流および研究会参加による教務力向上のための研修。

②到達目標

高等学校における芸術教育の現状、問題意識についての理解を深める。その上で、大学における芸術教育のあり方を見直し、高校から大学への発展的展開を考え、高大連携授業を有意義なものにしてゆく。

③活動内容

上述の研究大会において実施された講演会、パネルディスカッション、研究分科会に参加し、高等学校における美術科指導法についての知見を得る。

④評価

本学からは梶原新三・中村慎一・林三雄・椿敏幸・高橋愛・小倉康之の 6 名が参加した。それぞれ研究会や懇親会などに参加し、多くの高校教員と意見交換を行うことができた。また、会場に設置された玉川大学の広告用ブースには 30～50 名ほどの来訪者があり、芸術学部教育内容を説明しつつ学部紹介パンフレットなどを配布した。

4 昨年度（平成 21 年度）に提案された予定・課題の達成度について

- ・本学芸術学部では通常授業とは別に、芸術学部の学生としての基礎的学力・知識の向上を図るために、芸術教養テスト（アート・スタンダード・テスト）を過去 5 年間実施してきた。平成 22 年度はこれをさらに発展させるため、公式テキストの出版準備を進め、平成 23 年度から教科書として配布することが可能となった。同時に 1 単位の必修授業として展開していく予定である。
- ・本年度はアンケートを一時中断し、理論系科目と実技系科目を公平、客観的に評価するための方策を探った。拡大教授会において議論し、平成 23 年度からは全ての科目で同じフォーマットのアンケート調査を行うことで同意が得られた。
- ・芸術学部ではそれぞれの授業における学習成果を相互に参観することを推奨してきた。パフォーミング・アーツ学科は青山山形劇場、メディア・アーツ学科はデジタル・プラネット Music Japan TV および相模原・町田大学コンソーシアム、ビジュアル・アーツ学科は町田市立博物館などと産学連携を進め、学内教員のみならず学外者による授業参観を実施してきた。また、これらに加えて通常の実技・講義科目の授業参観も実施し、平成 22 年度は 6 科目を公開授業とした。学部所属の教員の約 5 割が授業成果報告会・発表会、参観授業に参加し、教務力向上のための意見交換を行った。
- ・年度末に専任教員と非常勤教員のコミュニケーションと教育目標の確認を目的とした研修会・親睦会を実施した。

5 今後（平成 23 年度以降）の予定・課題について

- ・本年度も教務力向上を目的とした講演会・公開講座・授業成果報告会を実施する。

学園祭にあわせて行われる授業成果報告会・公開講座の他、本年はアート・スタンダード検定が正式な授業科目として導入される年であることから、外部講師も招いて、アート・スタンダード検定の意義を明らかにするための研修会を企画する。

- ・昨年度の議論をもとに、新たな授業アンケートのフォーマットを作成し、全ての科目においてアンケートを実施する。
- ・外部講師を招き、本学芸術学部の特質を活かしたブランディングを考えるための研修会を行う。これによって、社会に向けてどのようなメッセージを発信していくかを再検討し、独自色の強いイメージ作りを目指す。
- ・本年度も学外セミナーへの教員派遣を行う。高大連携授業を意義深いものとし、大学における芸術教育の目的を明らかにするため、全国高等学校美術、工芸研究大会などへの参加を促す。

§ リベラルアーツ学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

本学部では①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。

学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。

FD 委員…学部における FD 活動全般をコーディネートする。また全学 FD 委員会で審議・報告された内容を拡大教授会にて報告する。

FD 研修会担当…学部で年 1 回実施される専任教員向けの FD 研修会についてコーディネートする。

※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

3 平成 22 年度の活動内容

(1) リベラルアーツ学部ハラスメント防止講習会

①概要（目的を含む）

教育現場で注意すべき各種ハラスメントの防止方法や適切な対応方法を理解するために、本学顧問弁護士によるレクチャーを受ける。

②到達目標

学部教員全員がハラスメントに対する危機意識を高め、上記内容を十分に理解すること。

③活動内容

講習会には 24 名の専任教員が参加し、ハラスメントが発生する要因や環境、当事者の意識などについて詳細な説明がなされた。特に i) 社会全般においてハラスメント（防止）に対する意識が高まってきていること、ii) 教員が常に「当事者になる可能性」を意識しながら日頃の職務を遂行する必要があることなどが強調された。

④評価

定量的な評価は実施していないが、講習会後の拡大教授会で参加教員からの意見を聴取した。その結果、全員から、ハラスメントをめぐる社会状況がより厳しくなる中、これまで以上に教員が上記 i)・ii) を留意すべきであるという意見が表明された。よって到達目標はほぼ達成されたと評価できる。

(2) 海外のリベラルアーツ教育実践校の視察

①概要（目的を含む）

本学部における今後のカリキュラムの参考とするために、海外のリベラル

アーツ教育の事例についてその内容・方法を視察する。

②到達目標

調査結果をもとに学部における教育実践を改善すること。

③活動内容

教員 1 名がエクスポアトリウム（米国カリフォルニア州）・ピアスカレッジ（米国ワシントン州）・クレアモントカレッジ（米国カリフォルニア州）といった施設・大学を訪問し、リベラルアーツ教育の内容・方法について調査した。特にクレアモントカレッジで実践されているコア・カリキュラムは、
i）日常的に複数の教員が授業運営に関わり、分野間連携がスムーズに行われている点や、ii）授業内で複数の教員が学生とともにディスカッションに参加することにより、学問的立場の違いを学生が実践的に学べる点などが特徴的であり、本学部の今後のカリキュラムにとっても非常に参考になった。

④評価

この視察結果を教育実践へ具体的にフィードバックするのはこれからであり、現時点で到達目標との関係から評価することはできない。なお、2011 年 2 月に実施された FD 研修会では、視察結果の報告とそれを受けたディスカッションが行われた。そこでは、上記コア・カリキュラムの諸実践が本学部にとって示唆に富むものであることが確認された。

（3）2010 年度リベラルアーツ学部 FD 研修会

①概要（目的を含む）

i）リベラルアーツ教育の強みを活かしたキャリア教育の検討、ii）新カリキュラム実施に当たっての重要事項確認、iii）2011 年度新入生研修の現場確認および打ち合わせ、の 3 点を目的とし、講演聴講および参加者全員によるディスカッションを行う。

②到達目標

学部独自のキャリア教育、および新カリキュラムの方針に関して教員間で共通認識をもち、それを学部としての体系的な教育実践へ活かすこと。

③活動内容

2011 年 2 月 17 日・18 日の両日に渡り、来年度新入生研修の宿泊地となるホテルにて、以下の内容を実施した。なお、参加教員数は 20 名であった。

- i）企業（IT 業界）人事部長による講演「玉川大学リベラルアーツ学部でのキャリア教育に期待すること」（質疑応答を含む）
- ii）新カリキュラムおよびキャリア教育の実施方針についての基調講演（学部教員）とディスカッション
- iii）初年次教育および二年次教育の実施方針についてのディスカッション（初年次教育については新入生研修の实地踏査を含む）
- iv）質の高いリベラルアーツ教育の実践方法を検討するディスカッション

④評価

定量的な評価は実施していないが、閉会時に参加教員から意見を聴取した

ところ、少なくとも i) 近年の学生に基礎学力低下が目立つ点、ii) リベラルアーツ教育の質を高めるためには分野間連携の深化が必要である点、という 2 点に関しては教員間で共通認識を持てたことが確認できた。したがって現時点で要求される到達目標は概ね達成できたと評価できる。

(4) 学生による授業評価アンケート〔2010 年度〕(Bb を利用)

①概要 (目的を含む)

学部教員がよりよい授業を展開するために、学部コア科目・学部導入科目・発展科目を中心とした科目群に関する学生の意識・行動をアンケート形式 (自由記述を含む) で把握する。

②到達目標

アンケート結果を鵜呑みにするのではなく、客観的に有用と思われる結果を教員が参考とし、それを今後の授業改善へ具体的に活かすこと。

③活動内容

2010 年度秋学期終了後、学部コア科目・導入科目・発展科目の主要な履修生である 1 年生・2 年生を対象とし、40 問程度の設問に対して 5 件法および自由記述にて回答してもらった。実査は Bb を通じて実施され、有効回答率は約 58%であった。

④評価

結果を授業改善へ活かすのは今後となるため、ここでは 1 年生のアンケート結果のみを概略的に (かつ抜粋して) 評価すると、まず重要な基礎科目である「リベラルアーツ入門」について、「オムニバス形式の授業は満足した」という命題に対して「あてはまる」という回答が 25.8%、「どちらかといえばあてはまる」が 43.1%であった。ここから、授業形式は概ね支持されているが、まだ改善の余地があることもわかる。また、「学部の授業全体について」というセクションの「今後のメジャー選択・将来の進路に役立つ科目があった」という設問では、「あてはまる」が 27.5%、「どちらかといえばあてはまる」が 32.7%であった。この数値も、科目運営を若干改善する必要性を示唆していると思われる。なお、ほぼすべての科目において、「授業全体についてよく理解できた」という設問に対しては「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計値が 80%を越えていた。この結果を見ると、内容を確実に習得させるという点で本学部における授業運営は高く評価できると思われる。

4 昨年度 (平成 21 年度) に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案された予定・課題は以下の通りであった。

- ①これまでと同様、FD への意識をより高めるとともに、インターアクティブな相互研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の「教育力」と資質向上を一層図っていききたい。
- ②学部運営の「PDCA サイクル」の中に FD 活動を位置づけ、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを構築していく必要

がある。

- ③中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」を踏まえ、リベラルアーツ学部における「学士力」とは何かについて検討し、それを本学部完成年度(2010年度)以降の新カリキュラム作成に反映させることが今後の課題となる。

①については FD 研修会の実施や拡大教授会におけるディスカッション、および日常的な教員相互のブリーフィングなどによって概ね実践されてきたと考えられる。②に関しては、本年度は仕組みの構築にまでは至らなかったため、引き続きの課題としたい。③についてはやはり FD 研修会や拡大教授会などにおけるディスカッションにて検討されてきた。新カリキュラムにもそれは反映されると思われるが、具体的には個々の授業実践の結果を待ち、評価することが求められよう。

5 今後(平成 23 年度以降)の予定・課題について

- ①これまでと同様、引き続き FD への意識をより高めるとともに、ディスカッションを通じた相互研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の「教育力」と資質向上を一層図る。
- ②FD 活動の学部内における位置づけをより明確にし、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを具体的に構築していく。
- ③リベラルアーツ教育における分野間連携の具体的プランを、教員相互の提案・議論を通じて検討し、本学部オリジナルの授業運営方針を構築していく。
- ④新カリキュラムの運営において、各々の教員が担当授業における学生の学習状況(たとえば予習・復習の実践状況)や理解度を確実に把握・改善するよう努力し、本学部における学士課程教育の質を保証できるようにする。

Ⅱ 教員研修

1. プレゼンテーション研修会

(1) 実施の概要

平成 14 年から継続してきた研修会の参加述べ人数は、248 名（うち在職者は 203 名）となり、専任教員の 8 割以上が受講済みとなった。それに伴い、平成 14 年～17 年までは年間 5 回、平成 18 年～21 年までは 3 回実施してきたが、平成 22 年度からは、対象者を新任教員中心にし、開催回数を 2 回に減らした。今後もこのペースで開催して、教員の基礎体力ともいえるプレゼンテーション力を維持管理していく予定である。

参加者のほとんどが新任だったこともあり、積極的に演習に参画され、ディスカッションでも効果的な意見交換が行われた。プレゼンテーション技法の向上だけでなく、教員間のコミュニケーションを図る上でも非常に効果的であった。特に FD 活動は「協同作業」で行うものであることを考えると、ここで培われた教員同士のつながりは貴重なものである。この教員間の輪を大切にしていけることが、さらに幅広い FD 活動へと発展するための鍵となり、最終的には学生への教育の質を高めることに役立つと確信するものである。

(2) 研修プログラム内容

2 日間、朝 9 時から 17 時までの日程で、演習が中心の内容である。特記すべきことは、ビデオを使った演習方法と、他の参加者による評価である。ビデオで客観的に教壇での自分の姿を観察することや、同僚である教員を前に模擬授業を行い、評価されるということは、大学という場ではなかなか経験できないことであり、それだけ成果も大きい。

また視聴覚教材の演習では、PowerPoint に頼らない教材作成方法として、マグネット教材を実際に作成していただく時間を作ったりして、より充実を図った。

第 1 日目	第 2 日目
第 1 章：プレゼンテーションの基本 第 2 章：視聴覚教材の使い方	第 3 章：質疑応答の技法 演習 3：基本的な技法の演習 演習 4：ディスカッション
演習 1：模擬授業 プレゼンテーション (1) 演習 2：改善点の明確化 ビデオ視聴による改善作業	演習 5：模擬授業 プレゼンテーション (2) 第 4 章：まとめ 演習 6：アクション・プラン作成

(3) 実施の状況

開催の日程、参加人数、開催場所は以下のとおりである。

- ・第1回： 9月14日（火）～9月15日（水） 3名 研究管理棟 507 教室
- ・第2回： 2月24日（木）～2月25日（金） 6名（1日目のみ7名）

研究管理棟 507 教室

(4) 実施後のアンケートから

アンケート項目は、継続的に変化を捉えるために、1年目から同じにしている。項目ごとにA～Eまでチェックするものとフリーコメントの両方からなる。

(4) - 1 チェック項目の集計結果

以下は、チェック項目の結果である。「#」はクラス番号で、その列の第3行、「計」（網掛け行）は2クラス分の合計である。「点」はA=5、B=4、C=3、D=2、E=1とした平均である。合計人数には無回答を含めていないので、項目によって人数が異なる。

参考のため平成14年から平成21年までの平均も下段に載せた。2年目以降、概ね4.5ポイント以上で数字に変化がない。当該研修会の重要性が理解され、内容や運営も定着してきたことを示す数字と捉えることができる。

① 全体について

総合満足度								授業に役立つか								スキルは向上したか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	3	0	0	0	0	3	5.0	1	2	1	0	0	0	3	4.7	1	1	2	0	0	0	3	4.3
2	5	1	0	0	0	6	4.8	2	6	0	0	0	0	6	5.0	2	4	1	1	0	0	6	4.5
計	8	1	0	0	0	9	4.9	計	8	1	0	0	0	9	4.9	計	5	3	1	0	0	9	4.4
21年	11	5	0	0	0	16	4.7	21年	12	4	0	0	0	16	4.8	21年	7	8	1	0	0	16	4.4
20年	16	4	0	0	0	20	4.8	20年	14	3	1	0	0	19	4.5	20年	3	13	3	0	0	19	3.8
19年	20	3	0	0	0	23	4.9	19年	20	2	1	0	0	23	4.8	19年	10	11	2	0	0	23	4.3
18年	13	3	0	0	0	16	4.8	18年	12	4	0	0	0	0	4.8	18年	3	11	2	0	0	16	4.1
17年	28	5	1	0	0	34	4.8	17年	27	7	0	0	0	34	4.8	17年	12	16	5	0	0	33	4.2
16年	29	3	1	0	0	33	4.8	16年	28	4	1	0	0	37	4.8	16年	10	21	3	0	0	33	4.2
15年	34	3	1	0	0	38	4.9	15年	32	4	1	0	0	37	4.8	15年	12	22	2	1	0	37	4.2
14年	41	15	2	1	0	59	4.6	14年	43	14	2	0	0	59	4.7	14年	10	38	6	4	0	58	3.9

② 研修会の質について

講習内容								講師								テキスト、教材、教具							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	2	1	0	0	0	3	4.7	1	3	0	0	0	0	3	5.0	1	3	0	0	0	0	3	5.0
2	5	1	0	0	0	6	4.8	2	6	0	0	0	0	6	5.0	2	6	0	0	0	0	6	5.0
計	7	2	0	0	0	9	4.8	計	9	0	0	0	0	9	5.0	計	9	0	0	0	0	9	5.0
21 年	12	4	0	0	0	16	4.8	21 年	16	0	0	0	0	16	5.0	21 年	12	4	0	0	0	16	4.8
20 年	12	7	1	0	0	20	4.6	20 年	21	2	0	0	0	20	5.0	20 年	19	4	0	0	0	19	4.6
19 年	14	9	0	0	0	23	4.6	19 年	21	2	0	0	0	23	4.9	19 年	19	4	0	0	0	23	4.8
18 年	13	3	0	0	0	16	4.8	18 年	15	1	0	0	0	16	4.9	18 年	14	2	0	0	0	16	4.9
17 年	21	12	0	0	0	33	4.6	17 年	33	1	0	0	0	34	5.0	17 年	29	4	1	0	0	34	4.8
16 年	27	6	0	0	0	33	4.8	16 年	32	1	0	0	0	33	5.0	16 年	29	4	0	0	0	33	4.7
15 年	26	10	1	1	0	38	4.6	15 年	35	3	0	0	0	38	4.9	15 年	31	5	1	0	0	37	4.8
14 年	36	17	3	2	0	58	4.5	14 年	51	6	1	0	0	58	4.9	14 年	40	17	2	0	0	59	4.6

③ 研修会の運営について

日程								時間配分							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	1	2	0	0	0	3	4.3	1	2	1	0	0	0	3	4.7
2	3	2	1	0	0	6	4.3	2	4	2	0	0	0	6	4.7
計	4	4	1	0	0	9	4.3	計	6	3	0	0	0	9	4.7
21 年	6	9	1	0	0	16	4.3	21 年	13	3	0	0	0	16	4.8
20 年	13	4	1	0	0	18	4.4	20 年	17	6	0	0	0	19	4.4
19 年	9	13	0	0	0	22	4.4	19 年	17	6	0	0	0	23	4.7
18 年	13	3	0	0	0	16	4.8	18 年	11	5	0	0	0	16	4.7
17 年	20	10	10	0	1	32	4.5	17 年	26	6	1	0	1	34	4.6
16 年	24	8	1	0	0	33	4.7	16 年	26	6	1	0	0	33	4.8
15 年	24	9	5	0	0	38	4.5	15 年	31	6	1	0	0	38	4.8
14 年	28	19	3	5	3	58	4.1	14 年	40	16	2	1	0	59	4.6

開催場所								事務処理・連絡							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	3	0	0	0	0	3	5.0	1	2	0	1	0	0	3	4.3
2	5	1	0	0	0	6	4.8	2	6	0	0	0	0	6	5.0
計	8	1	0	0	0	9	4.9	計	8	0	1	0	0	9	4.8
21 年	14	2	0	0	0	16	4.9	21 年	15	1	0	0	0	16	4.9
20 年	14	4	2	0	0	20	4.6	20 年	19	3	2	0	0	20	4.7
19 年	17	5	1	0	0	23	4.7	19 年	19	3	2	0	0	24	4.7
18 年	10	5	1	0	0	16	4.6	18 年	8	7	1	0	0	16	4.4
17 年	29	5	0	0	0	34	4.9	17 年	19	9	3	1	1	33	4.3
16 年	24	7	1	0	0	32	4.7	16 年	22	9	2	0	0	33	4.6
15 年	22	12	2	1	0	37	4.5	15 年	16	16	1	2	1	36	4.2
14 年	17	24	6	6	0	59	3.6	14 年	14	20	15	7	2	58	3.6

④ 研修会の開催について

研修を継続すべきか								他の人に参加を勧めるか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	3	0	0	0	0	3	5.0	1	2	1	0	0	0	3	4.7
2	6	0	0	0	0	6	5.0	2	5	0	1	0	0	6	4.7
計	9	0	0	0	0	9	5.0	計	7	1	7	0	0	9	4.7
21 年	13	2	0	0	0	15	4.6	21 年	11	4	0	0	0	15	4.7
20 年	14	4	1	0	0	20	4.5	20 年	12	7	0	0	0	19	4.4
19 年	18	2	2	0	0	22	4.7	19 年	18	3	1	0	0	22	4.8
18 年	14	1	1	0	0	16	4.8	18 年	12	4	0	0	0	16	4.8
17 年	23	6	2	0	1	32	4.6	17 年	23	7	2	0	0	32	4.7
16 年	27	5	1	0	0	33	4.8	16 年	29	4	0	0	0	33	4.9
15 年	33	4	0	1	0	38	4.8	15 年	34	2	1	0	0	37	4.9
14 年	46	9	2	2	0	59	4.7	14 年	41	14	2	2	0	59	4.6

(4) - 2 フリーコメント概要

項目別の数字によるポイントはすでに安定しており、改善項目を洗い出すという点では無意味である。こうした場合、ますますフリーコメントの重要性が増すことになる。9 名全員がコメントを書かれており、総数は 27 件あった。記述的に書かれたコメントを集計することは労力を要するが、この中には多くのメッセージが含まれているので、今後も集計をしていきたい。

ここでは、コメントをカテゴリー別に分け、数の多いものや注目すべきものを中心に、私見を含めて記述する。

■「有用性」についてのコメントでは、“改善点がわかった”“新たな視点を発見できた”など『気づき』に関するものが目立つ。これは、ビデオで自己を客観的に見たことが大いに関係すると思われる。改善の必要性を感じながらも、教育現場では切羽詰ったものとして捉えていないことが多い。当該研修会が刺激となり、意識の向上に効果があったと考えられる。“FDは必要である！”と明言したコメントがあった。これは、数年前に比べて確実にFDが浸透したことを示すものと思う。“早起きは辛かったが、それだけの価値があった”という、担当者にとって勇気づけられるコメントもあった。また、“教員養成授業に役立つ”など具体的に授業改善に有意義であることを示すものもあった。

■「内容」に関しては、現行カリキュラムに対する改善要望のコメントはなかった。全体的に満足していただいていると考えてよいと思う。“チームで参加できるとよい”“期間をあけると効果的”など、充実するための提案もあった。また、“他分野との交流ができる研修”“実技を中心とした研修”“FYEの内容を教える研修”など、研修会に対する積極的な姿勢が感じられるような意見があった。今後の研修会開催の参考としていきたい。教員同士の交流を図る機会を望む意見が多々あり、「ディスカッション」の有用性を感じることができる。当該研修会の内容として含めるだけでなく、他にも同様の機会を増やす努力が必要であることを感じた。

■「日程」については、“日程短縮を希望”という意見はあったものの“可能であれば”という条件つきであり、“この内容であれば2日間は当然”というコメントが示すように、内容に伴う時間の必要性についてはご理解いただけていると考える。誰でも、時間は短いほうがよい。特に業務多忙の時期であれば、尚更そう考えるのは当然である。しかし同時に時間をかけなければ得られないこともある。そのジレンマを感じながら、結局のところ当該研修会は「2日間でよい」という意見に統一されていると感じた。今後も現状のまま継続していきたい。なお“コミュニケーション・スキル向上には2日は不足”という意見もあり、ここでも、教員同士の交流を望む声がかかる。

■「その他」“思ったよりもよかった”“2日は長いという印象を受けた”など、事前の想像と異なったという意見があったが、いずれも受講後には良い印象を持たれたようである。当該研修会の継続に関しては、全員が“継続すべき”としているが、“免許を必要としない大学教員だからこそ、参加は個人の裁量に任せるべき”という参加形態についてのコメントがあった。尤もなご意見であるが、全面的に自由参加とした場合、果たして参加者が自主的に集まるだろうか。事前は消極的であったが、参加後で“よかった”と研修に対して積極的になる現状を考えると、少なくとも新任教員には、ある程度の強制力も必要ではないかと思う。実際、FD活動の一環として、“研修メニューを増やすべき”というコメントが多々寄せられており、それらのワークショップを開いても参加人数が少ないのが現状である。気持ちはあるが、多忙な業務の間に、自主的に参加を待つだけでは無理だということを感じる。

(5) ディスカッションの実施

2日目午前中のディスカッションは、FD活動の基盤となるコミュニケーションを円滑にする重要な役割を担っている。参加者にも好評で、全員で熱く語り合うことができた。参加者のコメントからも、もっと時間をとって本音で話し合い、その意見を集約して、さらなる改善に結びつけていくことが、次のステップとして必要だと感じる。

これだけ大規模な大学の中で、学部・学科という壁を越え本音でフリーディスカッションをすることは、大変価値がある。コミュニケーションが円滑になるという効果だけでなく、FDに関する共通理解を得られることが、より重要である。FD活動について共感して築いた人間関係が、これからのFD活動を支える原動力となると感じている。

“より質の高い教育をしたい”、“玉川大学の価値を高めたい”、“学生に満足してほしい”という熱意に溢れている意見が多く出され、教員一人ひとりの熱い思いが感じられた時間であった。これらの意見は、積極的かつ建設的なものばかりで、今後のFD活動の幅を広げるための参考になると考えられる。

本年度からはクラスが2回だったので、意見の数は少ないが、全員が積極的に意見を出し合った。多くが新任教員であったため、成績評価の仕方やFYEの運営など、実務での悩みに関する意見交換も行われた。また授業の工夫など、参考になるアイデアも出され、具体的な提案が出されたことも特記に値する。

ここでは、ディスカッションで出た意見を、クラス別に列挙する。2クラス分を統合せずにクラス別にするのは、フリー・ディスカッションの形式にしたため、出てきたテーマがクラス別に異なるからである。また、なるべく生の声が聞えるように、抜粋したりまとめたりしないで、単に内容別に分類するだけにとどめて記述する。なお、掲載にあたっては、参加者全員にコピーを送付し、事前承諾をいただいている。

第1回(9/14~15)(名簿順、敬称略)

紙谷信義、高橋愛、ジョナサン・リー (計3名)

3名という少人数にもかかわらず、活発な意見が出された。FDの重要性が指摘され、もっと多くの教員が参加するような仕組み作りが提案されるなど、改善活動への意欲が感じられた。アンケートの効果的活用、シラバスの書き方、成績評価など、多岐に亘る意見交換が行われた。

★FD活動について

- よい研究がよい授業に結びつくためにもFDが必要である
- 学生は、授業を通じてしか先生の研究を知ることができないからこそ、授業改善は必須である
- 学生にとっては、常勤も非常勤もないので、非常勤講師もFD活動に含めるべき
- 学生もFD活動に巻き込む必要もあるのではないかと
 - 学生の考えやアイデアを活用しないと、もったいない
 - 学生からの意見を吸収する仕組みが必要ではないか

- FDの目的を明確にするべきである
 - 目的意識のないFDには、得るものはない
 - FDは誰のため？学生？教員？それとも形式だけ？
- 全員参加の工夫が必要である
 - 一部の教員だけでなく、なんらかの形で全員が参加しないと無意味である
 - ワークショップに出たが、参加率の低さに驚いた
 - 年間1人何回はワークショップに出るなどの工夫が必要ではないか？
- 授業力は教員に必要である
 - 面接のときに授業力を見る大学が増えてきている
 - 教員養成を担当する教員には、授業力は必須である
 - 玉川は学士課程に重点を置いているので、授業力が問われる
 - 大学が専門教育をするだけの場であればFDは不要だが、教養教育から始めるから必須になる

★FYEについて

- 教員の研修が必要である
 - 専門外で分からないことが多々ある
 - 内容が不明確な場合がある
 - 先輩教員に聞いてみると、人によって内容が異なっている
- 内容を再考する必要がある
 - 玉川大学で教えるべき内容かどうかを精査する必要がある
 - 学生に必要な情報ばかりとはいえない
- 学生の立場で考える必要がある
 - 学生が“よかった”と思える授業にするべきである
 - 他の授業を取りたかったという声も聞こえる
 - 不要だと考えている学生もいる

★シラバスについて

- シラバスのひな型があるとよい
- 提出時期を考慮すべき
- 秋学期の分を前年末に提出するのは厳しい
- シラバスの本来の意味を、学生も教員も理解していないのではないか
例：シラバスを予定表だと思っていると、融通がきかなくなる

★公開授業について

- やり方を徹底するべきである
- ペアで1つの授業を担当して、お互いにコメントし合う方法は効果的である
- 公開講座で教員同士が評価し合うのは重要なことだと思う
- 同じ専門の教員が集まって授業改善について話し合うことができる

★学生によるアンケートについて

- アンケートの実施方法について
 - 学部によって異なることがある（徹底していない）
 - アンケート用紙を教員が集めるケースがある
 - 学生が用紙を集めるように徹底するべきである
- アンケートの目的
 - 結果をそのまま教員の評価にするべきではない
 - 授業改善が目的であって、教員評価のためではない
 - アンケートの目的を学生にも周知させるべきである
 - アンケートの目的を教員も知るべきである
- 記名について
 - 特に記述部分は記名式にするべきである
 - フィードバックするためにも記名式がよい
 - 学生は必ずしも記名式をいやがらない
例：出席カードに希望を書かせると、きちんと書いてくる
 - 授業改善に結びつけるには、記名の上で責任をもって書く必要がある
 - 無記名のほうが自由な意見が書ける
 - 目安箱のようなものを作れば、無記名で多くの意見を聞ける
- アンケート結果の活用
 - 結果をフィードバックする必要がある
 - 結果を改善に結びつけているか
 - アンケート結果が悪い教員には、強制的にワークショップに出席させるなどをすれば、有効活用になる
 - 要望を聞いて、できないことは“できない”と説明するべきである
- 項目について
 - アンケート項目を再考するべきである
 - 講義と演習ではアンケート項目を変えるべきではないか
 - 学部、学科でも項目を変えるべきではないか
 - 不明確な項目がある
例：“わからない” → “今日？” “学期全体？”

★新任教員研修会

- 非常に役立った
- 2日間は長かった（1日にまとめられないか？）
- 研修会のときに説明されなくても、コンタクトポイントだけ教えてくれればよい項目もあった
- 他大学に比べて、親切だと思った

★学生の育成について

- 玉川は面倒見がよすぎる？
 - 大学院に重点を置いている大学では面倒を見ないが、学生が自立している
 - 玉川の場合は、自立していない学生が多いので、面倒を見る必要がある
 - 至れり尽くせりが、学生にとって良いこととは限らない
- “自立した”人の育成を考えるべき
 - 大学4年間だけでなく、社会に出たときのことを考えるべきである
 - 社会に出たときに“自立できる”学生を、排出することを考えて教育するべきである
 - 社会に出たときにつぶされないためには、厳しさも必要である

★成績評価について

- 評価の段階について
 - $S \rightarrow A \rightarrow B \rightarrow C \cdot F$ という方法は一般的であるのか？
 - $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \cdot F$ と、どう異なるのか不明確である
 - $A \rightarrow B \rightarrow C$ の3段階ではきめ細かな評価ができない
 - 同じAでも、A+、A-などがあるとよい
- 評価基準について
 - 評価基準についての共通理解がない
 - 学生も自分の評価の理由を知りたいはず
 - 基準が明確でないと、学生にも説明できない
- 就職活動の扱いについて
 - 就職活動で欠席した学生の扱いが明確でない
 - 「就職活動」の解釈が不明確である
例：エントリーシートを書く時間も就職活動？

第2回（2/24～25）（名簿順、敬称略）

水野貴敏、野口穂高、佐藤貢一、大豆田啓友、高須一、中村香（計6名）

議事録として記述する内容は少ないが、これは1つの項目に対して深い議論がなされた結果である。非常に活発な議論であったことをご報告する。特にFD活動への積極的な提案、授業改善へのヒントなど、前向きな意見が多く出された。

★FD活動について

- FD研修会について
 - 学部を超えた研修は、非常に価値がある
 - さらに、理系と文系で分けて実施すると効果的である
 - 専門分野別の研修会も必要である

★FYE について

- もっと、グループ討議を取り入れて授業をするべきである
- 講義スタイルでは、効果的でない

★公開講座について

- 自分の勉強にはなるが、授業改善に結びつくかどうかは疑問である
- やりっぱなしでは効果はない
- 実施すること自体は非常によいことである

★教員の仕事について

- 教員の仕事
 - 教員が行う事務処理が多い（簡素化できないか？）
 - 情報共有ができないために無駄な労力を使うこともある
 - 新任教員にとって、分からないことが多々ある（運営など）
- 協力体制
 - 教員同士の協力体制がないため、教員間の情報共有ができない
 - 学生の質に関しても、教員同士がもう少し話し合う必要がある
 - 教員と事務との連携がもっと必要である
 - 新任教員には、ジョブコーチ（学内の仕事の流れや事務処理など、こまごまとしたことのノウハウを教えてくれる人）が付くとよい
 - 身近な教員同士が支えあう共同体がない
 - 同じ授業をチームで担当する場合には共同体がある（大変よい関係）
- 話し合いの場
 - FD サロンの集まりがあるとよい
 - 教員・事務などが共通に話し合える場があるとよい
- 組織や体制の改善も必要だが、それでは解決にはならない

★授業形態（アクティブ・ラーニング）について

- 授業への取り入れについて
 - 運営は大変だが、確実に効果的である
 - 理系の授業にアクティブ・ラーニングを取り入れるのはむずかしい
 - ヨーロッパなどでは、理系でも共同型学習が盛んである
- 効果について
 - 異なる意見の人とコミュニケーションができるので効果的である
 - 講義を聞くより、グループで共通に学習することのほうが身になる
 - 学生の達成感が得られる
- 目的意識について
 - 共通目的を持って臨まないと失敗する
 - 全員が目的を共通に理解した上で実施すると、達成感が得られる
 - ディスカッションそのものを目的にして失敗したこともある
 - “何のための” ディスカッションかを理解させることが重要である

- 運営方法

- 100名ぐらいのクラスでも、小グループに分ければ実施可能である
- 大がかりなグループでなくても、ペア学習を組み込むことによって、グループ活動の効果を得られる
- 個人思考の時間を含めることから、グループにすると話し合いがうまくいく（個人→グループ）
- グループで話し合った結果、個人の意見をレポートで提出させる方法だと、考えがまとまる（グループ→個人）
- グループ活動では、結果だけでなく過程も重要である
- 必ずしも、結果を出す必要はない

★学生の育成について

- 学生の質

- 一部の学生の学力が落ちているため、学力面でのフォローに時間がかかる
- 基礎的学力がない学生でも、一人前に育成して卒業させる義務がある
- 「基礎学問」の時間は短縮、内容は同じ、さらに学生の基礎学力が落ちている現状では、改善がむずかしい

★成績評価について

- 評価期間が短すぎる

- 評価結果に応じた指導ができない
- レポートの採点の時間が短すぎる
- レポートのコピペを見極めるには時間が必要である

- 評価を出せばよいのではなく、結果に応じた指導が必要である

（6）実施の成果

プレゼンテーション研修会の実施も9年を経て、大多数の専任教員が受講済みとなり、当該研修会はすでに玉川大学において定着してきた。フリーコメントやディスカッションからも分かるように、当該研修を通じて教員間に相互理解が深まり、FD活動への参画意欲の向上に寄与してきた。この間、改善への提案に結びつくような具体的な意見も多く出てきた。こうした具体的な提案は、大きな進歩と考えることができる。

どれだけ準備しても、熱意をこめても、学生の視点で自分の授業を評価できなければ、改善はできない。残念ながら、自分の姿を自分で見ることは不可能である。それを一部だが可能にするのは、ビデオである。学生が、自分の授業をどのように受け止めているかを、実感として体感するためにも、ビデオを使った当該研修は有意義だと信じている。

また対外的にも知られることとなり、他大学からの問い合わせも来ている。どこの大学でも、FD研修会の実施は多くなってきたが、プレゼンテーション研修会を個別にビデオまで使用して実践しているところは少なく、今後も注目される活動のひとつとなると思われる。

(7) 今後の課題

当該研修会は着実に成果を上げていると考えることができるが、FD 活動全体を考えると、非常に小さい一歩を踏み出したに過ぎない。参加された先生方から、ディスカッションや休み時間の会話を通じて、多くの積極的な提案がなされている。これらの意見から今後の課題として取り上げらるべき事柄を洗い出して、ここに記載しておく。

a. 改善に結びつけるためには、次の段階の研修会が必要である

当該研修会の目的は、「プレゼンテーション技術の向上」ではない。それによって「授業改善」が行われ、さらに「教育の質向上に役立つ」ことが本来の目的である。そのためには当該研修会の実施だけでなく、次の段階の研修会を検討することが必要である。

まずは各学部、学科ごとに、講義内容だけでなく設備や環境を考慮した研修会が必要になる。学部によっては公開授業などを頻繁に実施しているようであるが、玉川大学全体として、こうした学部、学科に特化した研修会の実施が期待される。

b. 大学全体としての講義力を向上させるには、受講対象者を拡大する

当該研修会は、専任教員のみが対象である。しかし、学生にとっては常勤も非常勤も関係なく、「先生」である。今後は非常勤講師、特に講義形式が多い学科を担当する人に対しても、研修会を広げていく必要が出てくるのではないかと考える。

c. 研修会を継続するには担当者を拡大する必要がある

今後の展開を考えると、当該研修会の担当者を養成する必要がある。こうした研修会は属人的なものであってはいけない。特定の担当者しかできない研修会ではなく、誰もが担当できるプログラムにするべきである。誰が担当しようとも、また何年たとうとも必要なプログラムとして継続していくことに価値がある。実際、FD 活動が盛んな大学でも、これだけ継続して1つのプログラムを実践している大学は少ない。

単発的なイベントに終わる FD ではなく、地に足のついた本当に役立つ FD の実績を残すためにも、10年、20年とこの研修会を継続する方策を検討することが大切だと感じている。そのためにも、人材確保の必要性を感じる。

2. 新任教員研修会

平成 23 年度採用の新任教員（助教以上）に対し、大学 FD 委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は平成 14 年度より開始されたもので、9 回目の開催となる。参加者 12 名で、2 日間の日程で行われた。

日 時：平成 23 年 2 月 23 日（水）10:00～17:00 、24 日（木）10:00～16:30

場 所：大学 9 号館 400 教室

対 象：平成 23 年度採用の助教以上の新任教員

研修目的：・玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。

・専任教員としての業務に必要な知識を得る。

到達目標：・玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明
することができるようになる。

・専任教員としての業務を理解し、遂行することができるように
なる。

（１）研修プログラム内容

1 日目：2 月 23 日（水） 会場：大学 9 号館 400 教室

時 間	内 容	No.	担 当
10:00	開 始／研修説明		人事部
10:05	開催にあたって		小原芳明 理事長
10:25	新任教員紹介		人事部
10:40	講演「玉川大学の教育 ―高等教育の文脈―」	No.1	島川聖一郎 理事・芸術学部教授
12:00	昼 食		
13:00	キャンパスツアー	別途 配付	学士課程教育センター 教学部、人事部
14:30	教学事項について ・玉川学園の組織機構／玉川大学の概要 ・各種運営担当、担任業務、教務指導・学生指導 ・年間授業計画 ・学則・規程等（授業、休講、補講、試験、成績等） ・教学事務手続要領（研究費、出張（国内外）等）	No.2	教学部 教務課 授業運営課 学務課
15:40	本学の I C T を活用した教育 Notes システムと Notes 掲示板の活用	No.3	e エデュケーションセンター
16:50	質疑応答／翌日の予定説明		人事部
17:00	終 了		

2 日目：2 月 24 日（木） 会場：大学 9 号館 400 教室

時 間	内 容	No.	担 当
10:00	研修説明		人事部
10:05	アカデミック・ポートフォリオについて 研究者情報システムについて	No.4	学士課程教育センター 教学部教務課
10:25	服務について	No.5	人事部
10:55	生活上の学生指導について	No.6	向山光則 学生センター長
11:10	玉川学園の個人情報保護方針について	No.7	教育環境コンプライアンス室
11:40	キャンパス・カード用写真撮影		総務部
12:00	昼 食		
13:00	「学士課程教育答申からみた 新しい授業運営について」	No.8	菊池重雄 教学部長
15:30	懇談会		大学FD委員会
16:20	質疑応答／まとめ		人事部
16:30	終 了		

＜別途配付資料・参考資料＞

No.1：玉川学園創立 80 周年記念誌『TAMAGAWA 80th Anniversary －そして未来へ』

No.2：学校法人玉川学園組織機構、組織機構図、学部運営組織、教職員在籍者数、
在籍学生数一覧（教学部教務課）

教学 Information, 個人研究費マニュアル（教学部学務課）

No.4：玉川大学研究者情報システム操作手順書（教員用）（教学部）

No.7：「環境問題と ISO 14001」（教育環境コンプライアンス室）

個人情報保護マネジメントシステムガイドブック（教育環境コンプライアンス室）

わかりやすい個人情報保護のしくみ（教育環境コンプライアンス室）

「学校における生徒等に関する個人情報の適正な取扱いを確保するために事業者が
構すべき措置に関する指針」解説（教育環境コンプライアンス室）

学校法人玉川学園コンプライアンステキストブック（教育環境コンプライアンス室）

その他：「First Year Experience」（学士課程教育センター）

＜送付済み＞

・小原國芳『全人教育論』玉川大学出版部

・玉川学園編『愛吟集』玉川大学出版部

・「全人 2011 年 2 月号」玉川大学出版部

・Tamagawa 教職員ハンドブック 2010

・玉川学園 玉川大学 2010 Tamagawa Academy & University

・図書館利用ガイド

（２）実施の成果

第１日目には、本学における教育について高等教育のコンテキストから参加者に理解してもらえるような講演の時間を設けた。また、専任教員としての業務に必要な教学事項や服務に関する事項などとあわせ、「学士課程教育答申からみた新しい授業運営について」と題した講義とワークの時間を設け、大学における授業運営にすぐに役立つ内容を盛り込んだ。研修会の運営にあたっては、受講者にとって参加しやすい空間・環境を整えることを心がけた。

研修内容・資料・講師の説明については、参加者の全員が、「とても充実していた」、あるいは「充実していた」と回答している。

今回の研修のよかった点についてのコメントは、次のとおりである。

よかった点：

- ①とてもよく構成された研修の流れだった。
- ②４月に向けて、頭の切り替えができた。
- ③大学で教えるという経験は初めてなのでいろいろと考えさせられた。
- ④知りたいと思っていたことが殆ど内容に組み込まれていてたいへん助かった。
- ⑤不安に感じていた一年次セミナーをはじめとする事項が少しイメージできた。
- ⑥始業にあたって知っておくべきことを学べてよかった。
- ⑦他の新任の先生方との出会いもよかった。
- ⑧４月の着任に当たって不明な点、疑問な点が十分な資料とともに的確に説明され、たいへん役に立った。
- ⑨特に、菊池教学部長の話は、玉川での教育を行ううえで参考になった。
- ⑩今後の行動と考え方の面で、菊池教学部長の話が参考になった。
- ⑪菊池教学部長の話がたいへん勉強になった。
- ⑫専門部処の方たちから、大学の全体像や職務の様子を教えてもらえてよかった。
- ⑬FD委員の先生方を含め、同時入職の先生方と交流でき、安心できた。

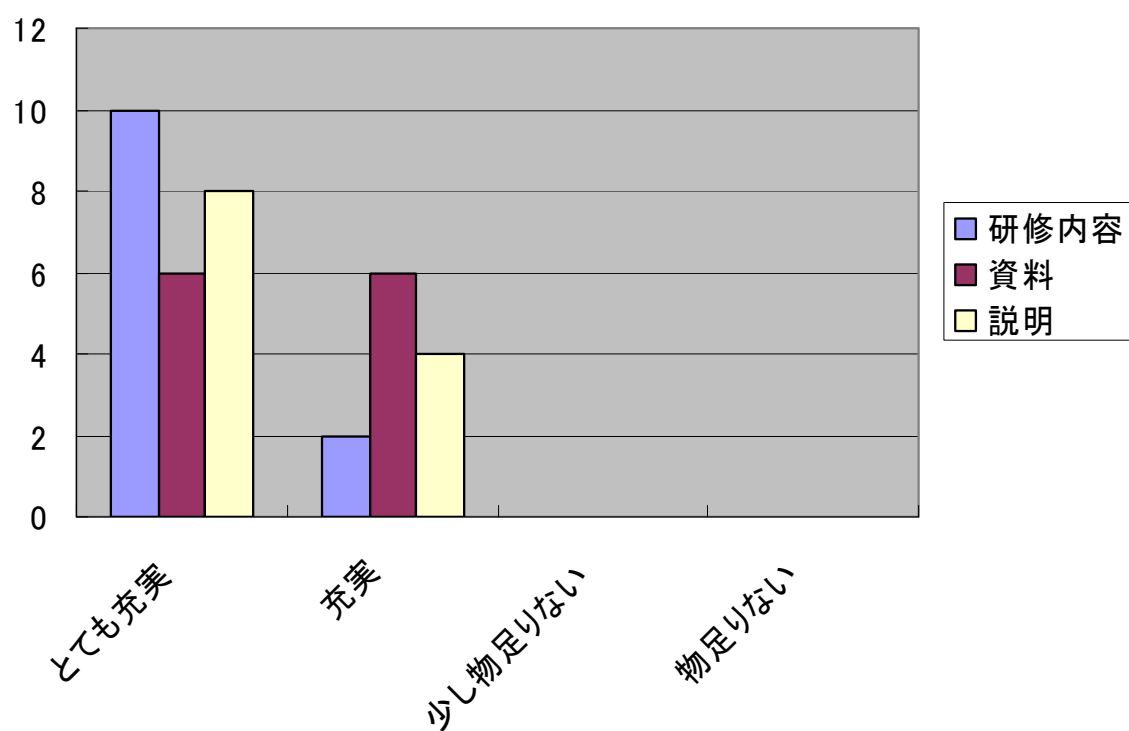
その上で、改善希望として、次のようなコメントをいただいた。

改善希望：

- ①重要な書類については英語の説明文もほしい。
- ②２日間という日程は長すぎると感じた。
- ③ワークショップは別の日に実施していただけるとよいかなと思った。
- ④コンピュータ関係の説明の際に、４月１日に必要とされることについての情報の一覧があるとよい。
- ⑤Web上での手続きについてもう少し詳しく説明していただけるとさらによい。

これらの意見から、本研修会の目的は達成できていると評価できる。次年度の開催に向け、引き続き、研修内容や提示資料の工夫と質の向上に努めたい。

新任教員研修会アンケート調査結果



	研修内容	資料	説明
とても充実	10	6	8
充実	2	6	4
少し物足りない	0	0	0
物足りない	0	0	0

以 上

Blackboard@Tamagawa 活用事例

01 文学部比較文化学科准教授：實川 真理子先生

毎日の英語学習に活用

實川先生は、コミュニケーション理論・マスメディア論・文化人類学を学んだ後、国際協力機関で社会開発の実務に携わった経験から比較文化学科では国際協力・文化交流領域を担当されています。1980年代後半からのグラフィックインターフェイスとインターネットの草創期に、シリコン・バレーで大学院生として刺激を受け、国際協力の現場を含め、人間生活を豊かにするための ICT の活用法に取り組んでいます。本学では2005年以降全ての担当科目で Blackboard@Tamagawa（以下 Bb）を活用、教員だけでなく、学生達も Bb を主体的な運用ができるよう側面援助や指導を行うなど、教育現場での ICT の可能性を多様な観点から試しています。



科目の実施規模と講義での Bb の活用

◆科目名：メディア・イングリッシュ

（5号館コンピュータ演習室の定員（46名））

◆授業概要：教科書ではなく、ネットで英語 News サイトにアクセスし、異なる国々の多様な視点の News を視聴するスキルと習慣を身につける。特に、News の背景を理解することで、英語の聞き取りを促進、持続的な視聴習慣を形成を目標としている。

基本構成

コースメニューで「アナウンス」「情報」「Audio Visual 教材」「毎日練習」「講義」「マイ成績表」「掲示板」を設けている。

「アナウンス」は、その日掲載のニュース内容と英語学習のポイントを紹介するほか、例にあるように、台風接近による全学休講への対応を即座に告知など、授業の運用にも活用している。この時は、学生が自宅にしながら通常の授業時間に Bb 上で授業を実施することができた。

「情報」には、英語で発信されているニュース（日英米豪だけでなく、アジア・中東・アフリカのテレビ局）サイトの URL を掲載し、クリックするだけで世界中の News を視聴できる。その他、インターネットベースで無料で提供されている英語教材サイトなどを紹介している。



図1. 基本構成画面

「Audio Visual 教材」と「毎日練習」

この授業では予習・授業・復習という枠組みではなく、毎日 News を聞いて、授業時に1週間のまとめと News 内容の理解にあてるとい

構成をとっているため、News を毎日視聴するのが面倒でなく、かつ、listening と語彙・文法の確認できるデザイン作りに苦心している。毎学期修正を入れ、直近では次のようにした。



図 2. Audio Visual 教材

学生は、「Audio Visual 教材」に掲載される URL からニュース等の指定動画を視聴し、「毎日練習」に掲載される動画用の課題に回答して平常点を得る。ニュースサイトでは、掲載記事の更新が頻繁なので、課題に取り組む前に指定ニュースが削除されることもあり、ニュースを毎日フォローするという習慣をつけないければ、即、平常点に反映されてしまう仕組みとなっている。学期全体の累積点が平常点となる。

項目名	Details	期日	最終添削日、変更日、または採点日	成績	満点
100109	[詳細]		2010/01/09 19:32	20	20
100111	[詳細]		2010/01/11 13:04	17	20
100114	[詳細]		2010/01/14 14:06	20	20
100115	[詳細]		2010/01/15 13:57	13	20
100116	[詳細]		2010/01/16 19:18	19	20
100117	[詳細]		2010/01/17 22:26	20	20
LastClip	[詳細]		2010/01/18 10:42	10	10
100121	[詳細]		2010/01/21 21:08	50	60

図 3. 学生権限アカウントから見た成績表

「講義」とヒューマンタッチ

この授業をコンピュータベースの市販 e-learning と差別化する要は、学生の習熟度と興味にファインチューニングしながら、授業内容を機敏に展開することだと考える。例えば United States of America という国名が示す国の成り立ちを知らなければ、連邦政府・州政府・個人の関係がわからない。right や interest といった社会の基本となる多義語の文脈と用法を学び憲法を考える視点を通して、News の理解促進を図る。「今」の News と歴史と個々の学

生の関連付けを図りながら、聞取りから学生が News について考えたことを、自分のことばにする機会として授業を構成する。

授業開始時に Bb にログオン、「講義」に掲載の 1 週間分の「毎日練習」の総復習から授業に入る。教員は、Wingnet システムで学生の Bb 上の動きをモニターし、課題により回答をクラス全体で共有するなど、Bb を授業内でも有効なツールとして活用している。解答提出後、「試行の統計」で学生の得手・不得手を確認し優先順位を付けて語彙・文法・内容を説明する。

問題番号	問題内容	回答数	正解数	不正解数
2	The meaning of 'miscegenation' is that a someone marries a person who has a different color. 'miscegenation' means is wrong bloods mix. Obama's father is a black, but his mother is a white. In 1960, then color segregation was there in many parts of the South. If a black man looked a white, the man was killed. To marry a black man and a white woman. This time, it didn't let them marry in over half the states in the Union. So, mixed society was impossible. In 1960, miscegenation still described ability to marry between White and Black in over half the states in the Union. So, mixed society was impossible. 'miscegenation' is a problem between in the black and white. In this case, Obama's father is a black (African) and his mother is white. In 1960, US has strong racism in the skin color. Black people were forced to live under that. That's reason why black and white married is abnormal. This is the reason of problem of humanism in the USA. 'Miscegenation' describes the mixed marriage. It was often used for discrimination. 'Miscegenation' is a opinion that people separate to race. And opinion especially separates to White and Black. Old age was even to order further separated. In that details 1960s, there are strong segregation in US. Then Mr. Obama emphasizes that to say about parents story. It was really hard even his father expressed his love for his mother at that time. Miscegenation means many people who stay a lot of race area. To get married Black and Whites. The miscegenation is 異種の人々。When his parents were married, states have miscegenation. The word 'miscegenation' means that people who have skin color couldn't be accepted their identities and looked funny by the world in those days.	10	8	2

図 4. 試行の統計（短答式の集約）

また、短答式の回答を集約し演習室のモニターに表示して全員で Best Answer を選ぶ。正解を与えられるよりも、不完全でもクラスメートの回答の方がより強い関心があり協調学習の効果を活かす。集約を教卓 PC 上で Word 文書に変換し変更履歴を ON にして、学生からの修正提案で添削していく。この過程で、学生達は語彙・文法と同時に発音やイントネーション、そして News に口頭でコメントをつけること自体を学ぶ。Bb を活用しての訓練後、実際にこうしたスキルを使う場面を想定した授業を行う。直近は、アメリカの学寮の朝食を模してコーヒーとパンを食しながら「オバマ大統領のノーベル平和賞」について話し合った。学期末評価が 1 番高かった授業だったが、理由が内容なのか朝食なのか、それは分からない。今後に向けて

e-learning と対面式授業をどのように組み合わせるのが最適か、携帯電話の進化をどのように組み入れるかを考えている。携帯端末による情報確認など視聴習慣の形成には効果大だと考えており、メディア教育推進室のご助言をいただきながら方策を考えていきたい。

01 Blackboard@Tamagawa 活用事例

経営学部国際経営学科教授：稲垣 明博先生

授業外の思考を確保させる活用

稲垣先生は、民法を専門分野にされています。私たちの命が芽生えてから終焉までの日々の生活における起こりうることに関する法律の情報「生活と法律」をはじめとして、「借地・借家制度の研究」「後継ぎ遺贈について」「人為的親子関係の創設」などの研究活動などに取り組まれています。また、教育活動においては、コア科目の総合科目群「生活と法律」・経営学部専門科目群「民法」「プロジェクトセミナーⅡⅡ」などを担当されています。

今回は、Blackboard@Tamagawa（以下 Bb）のアセスメント機能を活用し、大人数の授業でテストを行っている事例を中心に紹介いただきます。



科目の実施規模と講義での Bb の活用

◆科目名：生活と法律（全学コア科目 250 名）
民法（経営学部 48 名）

◆授業概要：両講座も日本の法制度を条文、判例、学説を使って講義する科目である。多くの法学部では法学系科目を Bb やパワーポイントによる講義をすること自体、多くはない。また、玉川大学経営学部や全学コア科目で詳細な判決文を読むことや諸学説の紹介は時間的にも適当ではない。そこで両講座とも、種々の法制度の趣旨や役割を理解することと新しい法制度の動きをみることで、大きな視野で法律を考えられるようになることを目標としている。

基本構成

Bb ではその機能を最大限に使いこなす工夫をしている。コースメニューでは「アナウンス」「シラバス」「パワーポイント資料」「確認テスト」「ディスカッションボード」「私の成績」「教員情報」を設定している。コースデザインは自

由に変えられるので、学期ごとにボタンや色を変えることなどメニュー作成の遊びも用意されている。

①予習実施のための Bb

講義前に当日行う講義用パワーポイント資料を掲載している。それと同時にアナウンスで注意事項（用意するものなど）を明らかにしている。



図 1. 基本構成画面

②復習のための Bb

講義後に授業の理解度を自己判断できるようにするための確認テストを実施している。この

テストは10問から20問程度、正誤問題や多肢選択問題をランダム表示で出題している（1問2点）。これは、全員が同じ問題だと、よく考えずに友人間同士で同じ答えを入力することを防ぐために行っている。また、その答えに対するフィードバックを以前は正解、不正解と出していたが、問題が終わると簡単に正解、不正解が分かり、考えることや覚えることなく終わってしまうことが分かった。そこで、フィードバックは不正解のみ表示するようにしている。また得点もすぐには見えないように「私の成績」で表示できるようにしている。

確認テストは1回で終わらず、確認テストをまとめた問題を「中間テスト」で複数回出している。ただ、確認テストの問題が次第に増えていくことを防ぐため、「ランダム機能」を使っている。たとえば、200問たまったものから50問なり、一定の問題数をランダムに出し、さらに個々の学生には、問題を順序不同で出し、できるだけ手作りに近い出題を心掛けている。

確認テストの問題はコースのコピーで次学期以降も使えるので、問題作成の手間も省ける機能も付いているのはありがたい。

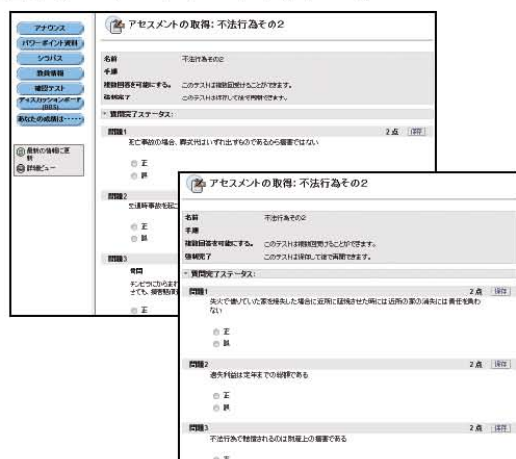


図2. ランダム・順序不同に設定している確認テスト

③成績センターの利用

確認テストは瞬時に成績センターへ送られ、個々の学生の点数と受験、未受験が一覧で表示されている。このため、最終アクセス日時と点数、受験・未受験を勘案して個人ごとにメールで学習を促している。

Bb利用上の問題点

B bは遠隔授業のツールであり、他大学の通信教育で使われている。玉川大学では対面講義にB bを併用することで、欠席による講義の空白は生じないし、24時間、学生に自由な時間で学習できる特性があり、積極的に学生が利用することで相乗効果が期待できる。

ただ、対面講義でもそうであるように学生が学ぼうとする意欲がなければB bの効果は期待できない。学生が自主的にアクセスしなければ何の効用もない。また、アクセスして確認テストを解いたところでも、単に先に受験した学生の問題をコピーして正解を書き写すことも学習とはいえない。この弱点を補強するものとしてディスカッションボードで討論させることも考えられる。一学期、継続して学ぶ意欲をいかに保たせるかも問題であろう。そもそも、確認テストの点数のみで講義に対する学生の評価ができるか問題である。B bはあくまでも補助的講義ツールであり、予習専門、復習専門、短答式問題の練習専門、パワーポイントの資料配布の簡素化に限定すべきだとする見解もある。このような使い方も否定できない。しかし、B bは通信教育のような遠隔講義に最適で威力を発揮している（熊本大学大学院、信州大学等の事例から）。その特性を生かし通学生向きにB bをアレンジすることによって、通学生に特化したB bの存在をすべて否定できないと思われる。

今後のBb

通学生用のB bを考察する際、学生が考なければ解けない確認テストの内容、受験期間の厳格化、正誤問題以外、文字を書き入れる問題、任意に記述する方法がある。これらによって信頼できる成績評価ができると思われる。また、本人確認も問われてくる可能性がある。B bを利用する教員には、勉強しようとする意欲を持つ学生をいかにサポートできるかをさらに考える必要性が問われている。毎週、B bの資料の作成、問題の作成、フィードバックの作成などかなり時間がさかれる実態をみるとB b利用の教員に対するサポートも期待したい。

01

Blackboard@Tamagawa 活用事例

芸術学部パフォーミング・アーツ学科教授：法月 敏彦先生

Blackboard 補講の試み

法月先生は、芸術とくに演劇（芝居）を専門分野にされています。能、文楽、歌舞伎など日本演劇史の研究をはじめとして、国立劇場で芸能資料調査や伝統芸能技芸養成事業に、国外で演劇資料調査や大学での教育活動に取り組まれています。

また、本学の教育活動においては、「演劇史基礎」、「現代演劇史」、「戯曲入門」、「日本演劇史」などを担当されています。

今回は、対面による補講の実施が困難な場合の対応として、受講生をより意識した構成で Blackboard@Tamagawa（以下 Bb）を活用されている事例を紹介いただきます。



科目の実施規模と Blackboard の活用

- ◆ 科目名：戯曲入門（芸術学部 1 年生 43 名）
- ◆ 授業の概要：演劇を成り立たせている要素のひとつである戯曲（台本・テキスト）を、具体的な作品の読解方法の会得を通して、現代における戯曲の意味を「上演」という観点から追求していく。とくにギリシャと日本の古典演劇とその台本の具体例を通して、現代の戯曲形式との本質的な違いを述べていく。

Web 補講実施の重大な理由

最近の厳しい大学教育の現状を反映して本学でも最低授業回数の確保が常識となり、やむを得ない休講に際して補講の質的向上が求められることになった。もともと古い体質の大学は知らず、もはや休講というものの自体が許される時代ではないであろう。

しかし、実際問題としては、大学全体の行事に伴う休講などがあり、その場合は、学生本人が教室に来られず、補講せざるを得ない。また、

実技実習の盛んな芸術学部では、夜間や土曜の補講は実質的に行うことが難しい。補講時間と実技実習時間が重なるからである。従って、学校行事などの理由による休講を補う方策としては、現状では Bb を使用した Web 補講しか実効性がないということになる。

Bb 補講の試行例

既に試みた Bb 補講の内容を簡単に示す。

- (1) 補講ビデオ（約 15 分間）
- (2) 課題論文の熟読（120 分以上）
- (3) 課題報告書の作成（120 分以上）
- (4) 報告書の送付（電子メール添付）

以上を評価して、補講の出席とするかを判断した。

この補講は全体の所要時間としては、授業時間の 100 分（2 単位の場合）を超えてしまうが、単位認定に必要な予習復習の時間（200 分）が大半含まれていると考えれば、この Bb 補講が、いわば効率の良いものであることになろう。



図 1. Bb 補講指示画面

補講内容の詳細

補講内容の各項目についてもう少し解説を加える。

(1) 補講ビデオ

基本的には、一回分約 15 分間程度の短い講義を録画した。15 分という短さの根拠は、このビデオを見る受講生のパソコン環境、また、一般的な集中力の持続可能時間などを考慮した結果である。小さな画面のモニターで長時間のビデオ鑑賞は無謀だと考えた。

因みに、講義や講話なども、一つ的话题を 15 分程度にして話題を切り替えていくと受講者の興味を持続させることができるらしい。なお、録画を行う際は、板書の代わりに、重要と思われる用語を印刷し、その紙を磁石付きの透明なファイルに入れ、適宜ホワイトボードに貼りながら講義を行った。このようにすると、自筆でボードに書くよりも、素早く鮮明に録画できるからである。



図 2. Bb 補講用動画

なお、2 回以上、同じ補講で録画を用いる場合、2 回目の冒頭に 1 回目の要点を短く纏めて話すことにした。それは、受講生の都合で視聴に間隔が開いてしまう場合が想定できるからである。

(2) 課題論文の熟読

ビデオを見るだけでなく課題論文も Bb に添付して読んでもらうことにしたのは、補講内容を更に深く理解してもらいたいからであり、その熟読時間も補講の一部に算入するためである。ただし、ここに添付する論文は、補講内容に即したもので、かつ、私自身の執筆した論文に限定した。著作権の問題もあるだろうが、なによりも講義に代えるものであることがその理由である。つまり、自分自身の論文がない内容は補講に採用できない訳で、厳しいことかもしれないが自らに課した。

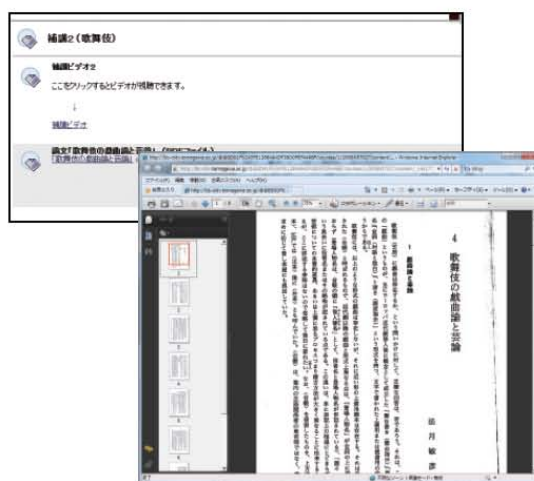


図 3. 課題論文のダウンロード画面

(3) 課題報告書の作成

短い講義ビデオと課題論文を元に、その内容をまとめ、受講生自身の考察を加えたレポートを作成して受講の証とした。

今後の課題としては、提出されたレポートを締切後に受講生全員が閲覧できる機会を Web 上に設定することである。このような機会を通して、一種の復習ないしは理解度の補完が期待できるためである。

以上簡単だが、Bb 補講の試行例として多少の参考になれば幸いである。

01

Blackboard@Tamagawa 活用事例

農学部生物環境システム学科非常勤講師：岡田 雄峰先生

カナダプログラムにおける Blackboard の活用において

岡田先生は、自然資源保全学（Natural Resource Conservation）を専門分野にされています。ブリティッシュコロンビア州立大学（The University of British Columbia）の河川生態保全学研究室・自然資源研究室を経て本学カナダ法人にて農学部カナダプログラムに携わられています。おもに、「地域環境論」、「比較文化論」を担当されています。今回は、岡田先生ご自身の教科での Blackboard@Tamagawa（以下 Bb）の活用に加え、プログラム全8教科に、学部引率教員や現地のサポート役を務める職員をTA 権限で登録することにより Bb 上の動きをリアルタイムで把握し、プログラム運営のよりよいサポートの情報源とされている事例を紹介いただきます。



科目の実施規模と Blackboard の活用

◆ 科目名：地域環境論他（農学部3年カナダプログラム受講生 春セメ 46名・秋セメ 37名）

運用体制について

カナダプログラムで*VIUが行う授業は、すべて英語で行われることから Bb は英語サポートの観点から活用されることが多い。例えば、教員が授業で使うパワーポイントの資料を授業の一週間前までに Bb にアップロードしてもらうよう要請している。そうすることで各学生が授業の予習・復習を自分のペースで出来るようになる。学生全員の英語能力が均一ではないから、授業中の英語のペースに全員が付いていけるとは限らない。Bb を活用することで、授業時間内だけに囚われないカリキュラムの運営が可能になる。また、プログラムでは「カナダでしか体験できないことを中心にカリキュラムを組む」事が根本的な枠組み作りの基礎になっている。従って、授業内容も実習・見

学・フィールドワーク等を中心に組むことが特色になっているが、このやり方には一つの欠点がある。それは天候や季節の変動によって授業スケジュールが流動的になることだ。例えば、Plant physiology and identification の授業では、カナダ特有の樹木類や草本類の同定を実野外授業で行うのだが、天候や季節によっては、実際に手にとって観察し同定できる種が変わってくる。従って、どの授業で、どの生態系で見られる、どの種を扱うかは各セメスターによって異なるし週単位でも変動する。こうした流動的な授業スケジュールをリアルタイムで学生に伝え、予習・復習させ理解させていくことを可能にしているのが Bb である。また、Presentation Technique for Scientific Expression と呼ばれる授業は、いわば、俗に言う ESL (English as a second language) の授業だが、これらの授業内容は、実は Plant physiology、Plant Propagation、及び Practicum の授業に出てくる理系のトピッ

*バンクーバーアイランド大学

クや単語を利用して組んでもらっている。ということは、英語の授業を教える教員は、理系の授業の内容を理解していないと内容を十分に教えられない。理系の教員も、英語の教員として携携が取れていないと自分の授業を学生に理解してもらえず授業が成り立たなくなる。更に VIU の広大なキャンパスの中で、理系と英語の教員がそれぞれ席を持つ建物が非常に離れている為、実際に顔を合わせて打ち合わせをするなどという恵まれた機会は殆どない。そこで活躍するのが Bb である。英語の教員は Bb に掲載された授業のパワーポイントを学生と同じようにダウンロードして予習し、そこで扱われているトピックを利用して授業内容をそのつど調整していく。理系の教員はポイントとなる部分をあらかじめメールで連絡し、英語の授業でしっかりカバーされるようにリクエストすることも出来る。Bb があることで教員同士の連携もずいぶんスムーズになりカリキュラム全体のクオリティーの向上に繋がっている。

指導上のメリット

私が担当する地域環境論では、授業参加の「機会」を「多様化」させることを念頭に Bb を活用している。学生の学習能力の多様化はここ最近のことではないが、学びのスタイルも同時に多様化しているように感じる。情報が視覚的に提供されたほうが吸収しやすいと言った学生も多いようだ。時間の制限があって授業では見せられない動画へのリンクなども Bb を使えば簡単に伝えることが出来る。しかし、そもそも授業で教えられる情報量はネットに存在するそれに比べれば微々たるもので（情報の質は別だが）、変化の激しい世の中ではどんな情報もすぐに陳腐化する。従って、地域環境論では情報の提供よりはいわゆる分析的思考（Critical Thinking）の方法を取得しながら環境問題を考えていくことに重点を置いている。例えば、各週の授業の合間に私が環境に関する時事トピックを BBS に投稿し、環境問題について、まず考えることを促す。そして、学生には自分なりの考えや集めてきた情報を投稿してもらう。授

業中に積極的に発言できない学生ほど BBS での投稿数が多いなどというのは珍しくない。また、教員が BBS 上でフィードバックを行うのと授業中にフィードバックを行うのでは学生側の受け取り方が全く違う。対面ではなかなか意思疎通が出来ない学生も、案外、Bb を媒介すると違った一面を見せたりすることがあり、それがコミュニケーションの足がかりになることも少なくない。当然ながら、BBS を使うと学生がお互いに学びあう機会も提供することが出来て、多様な学びの場の提供に繋がっている。



図 1. BBS 投稿画面

今後について

私は非常勤講師の立場で本業との掛け持ちで授業を運営するため、Bb の活用によって所定の授業時間数以外でもフレキシブルに授業が展開できることは非常に有難い。また、Bb はモバイル機器上でのアプリケーションプラットフォームも提供しており、玉川大学でもいち早くその採用をお願いしたい。どんな人でも経験があると思うが、一人で通勤・通学する電車やバスの中だと、ある日突然、とんでもないアイデアが閃いたりする。しかし、学校や職場で友達や同僚とがやがやしているうちにアイデアは消えてしまう。忙しい一日の中で深い考えに浸ることが出来る機会は本当に少ない。そんな貴重な時間が生み出したビッグアイデアを忘れないうちにすぐにその場で授業に反映できたならどんなにすばらしいだろうか。こんなことを言っていると、トイレの中から BBS に投稿してくる学生が出てくるかもしれないが。

Ⅲ コア科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要

(1) 概要

前年度同様、今年度も春・秋学期においてそれぞれ最終授業にて実施した（一部、科目担当者の都合等により補講・試験期間中に実施）。対象科目はコア科目の全科目（実験・実技科目を除く）であるが、学期により対象科目群を限定している。

春学期：全人教育・FYE 科目群、言語表現科目群、社会文化科目群

秋学期：全人教育・FYE 科目群、自然科学科目群、生活関連・総合科目群

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答学生数は次のとおりであった。

実施担当者数：春学期＝136 名／148 名（91.9%）

秋学期＝118 名／124 名（95.2%）

実施開講クラス数：春学期＝237 クラス／255 クラス（92.9%）

秋学期＝167 クラス／171 クラス（97.7%）

回答学生数：春学期＝9,509 名／11,435 名（83.2%）

秋学期＝6,487 名／8,061 名（80.5%）

(2) 実施時期

春学期：7 月 19 日（月）～7 月 23 日（金）

秋学期：1 月 17 日（月）～1 月 21 日（金）

※春・秋学期ともに一部の科目については補講・試験期間中に実施。

(3) 実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がクラスでマークシート用紙を配布、実施した。回答用紙の回収についてはクラスの代表（科目担当者が指名）が回収し、最寄りの事務室に提出することとした。

(4) 調査用紙（p.83 参照）

2. 集計結果及び公表（p.65～76 参照）

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

コア科目群（全体）、全人教育論、全人教育・FYE 科目群、言語表現科目群、言語表現科目群（英語）、言語表現科目群（英語以外の語学）、社会文化科目群、自然科学科目群、生活関連・総合科目群
--

また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者にのみフィードバックし、上記 9 分類についてはその平均値をホームページで公表している。

平成22年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

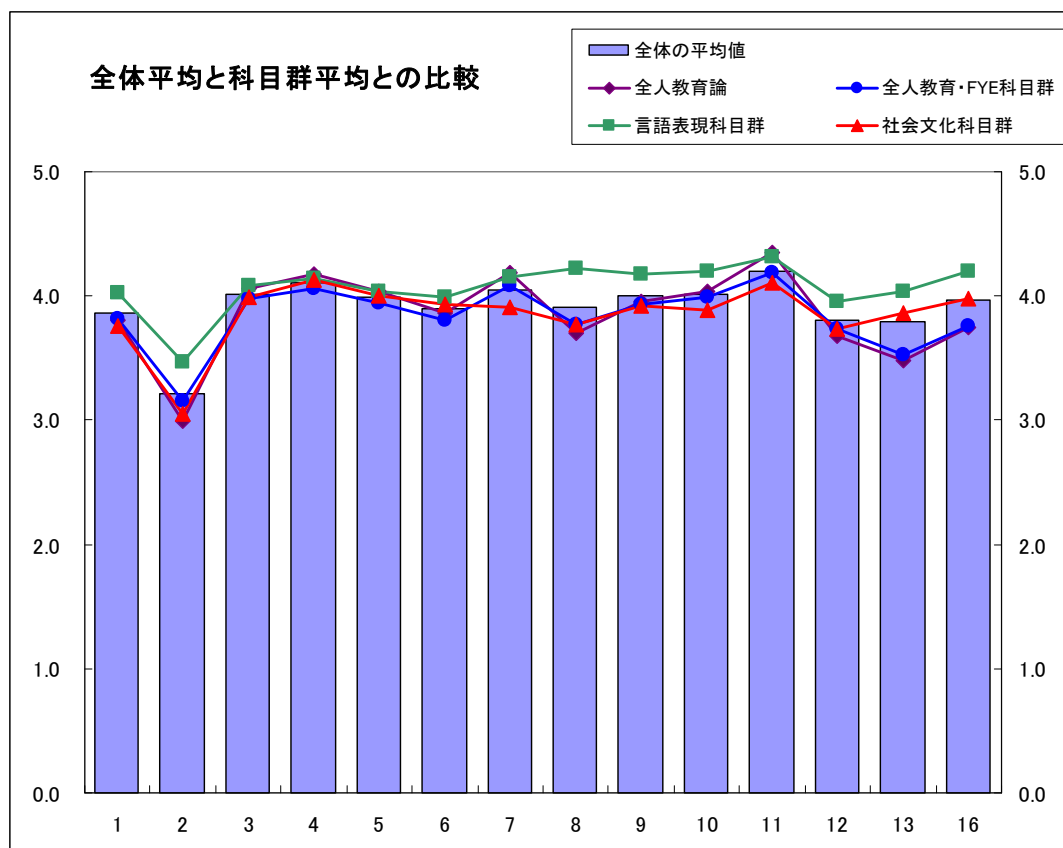
玉川大学

コア科目全体

回答数(全体): 9509

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	24.9%	43.4%	25.5%	4.9%	1.2%	10
	2 授業以外によく予習復習した	3.2	13.0%	25.7%	37.3%	17.4%	6.5%	20
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	34.1%	39.1%	22.1%	3.8%	0.9%	38
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	39.2%	36.6%	20.6%	2.7%	0.8%	30
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	34.1%	36.5%	24.9%	3.3%	1.1%	49
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	33.1%	33.5%	25.7%	6.0%	1.7%	33
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	41.8%	30.4%	19.8%	6.1%	1.8%	29
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.9	34.4%	31.8%	25.6%	6.2%	2.0%	37
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	36.5%	34.2%	23.9%	4.0%	1.5%	36
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	36.9%	35.0%	22.6%	4.1%	1.5%	27
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	46.3%	31.9%	18.3%	2.5%	1.0%	25
	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	26.7%	38.0%	26.3%	6.7%	2.3%	67
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.8	31.1%	32.5%	25.2%	7.2%	4.0%	74

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.0	38.4%	30.6%	23.0%	5.1%	2.9%	1064



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成22年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

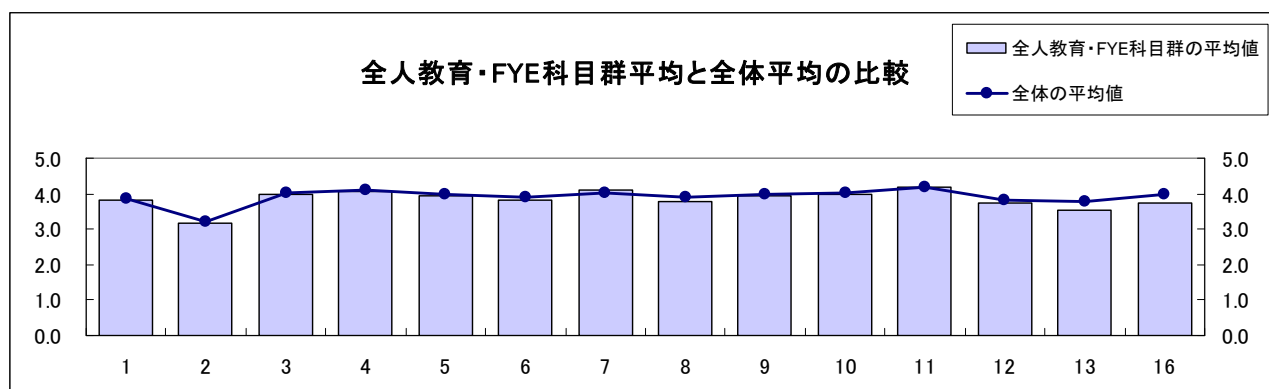
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群

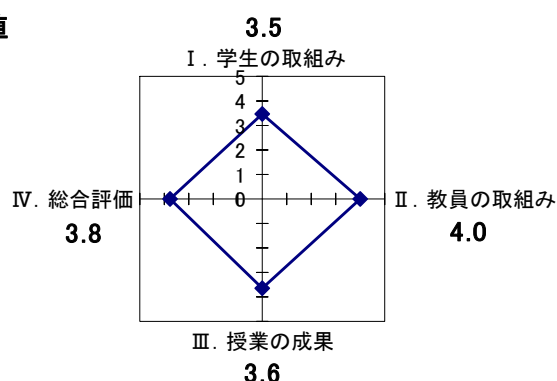
回答数(全体): 3389

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	23.4%	42.6%	27.5%	5.4%	1.1%	3
	2 授業以外によく予習復習した	3.2	12.8%	24.6%	35.8%	19.2%	7.7%	6
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	32.3%	39.5%	23.4%	3.9%	0.9%	13
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	37.0%	36.4%	22.6%	3.1%	0.8%	14
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	32.8%	35.3%	27.0%	3.8%	1.1%	24
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.8	28.9%	33.6%	28.6%	7.0%	1.9%	11
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	43.6%	29.9%	19.7%	5.5%	1.4%	14
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	27.4%	33.5%	29.9%	7.3%	1.9%	15
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	32.1%	36.4%	25.8%	4.6%	1.2%	12
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	35.1%	36.1%	23.3%	4.1%	1.4%	9
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	46.1%	31.3%	19.1%	2.5%	1.0%	8
	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	23.2%	38.6%	29.2%	6.5%	2.5%	29
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.5	21.6%	31.2%	31.6%	9.8%	5.8%	28

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.8	29.2%	31.8%	28.5%	6.2%	4.2%	329



分野別平均値



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成22年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

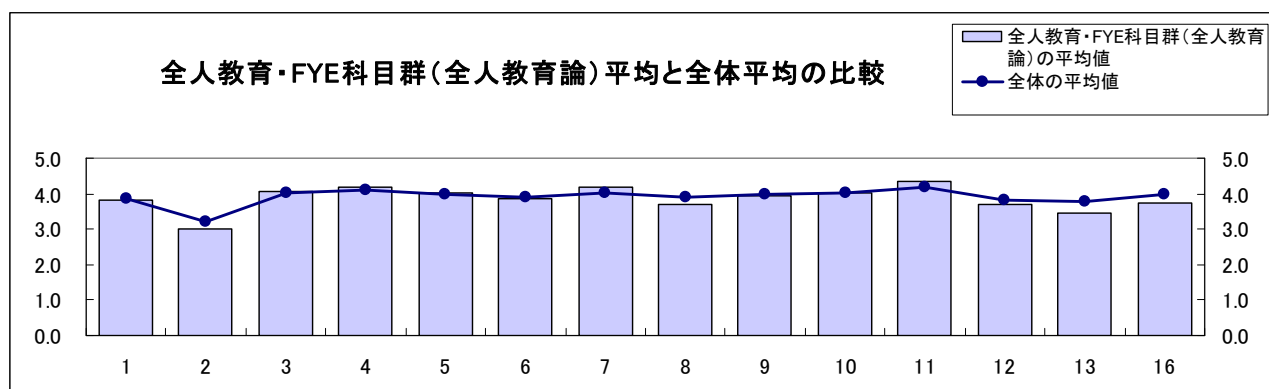
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群 全人教育論

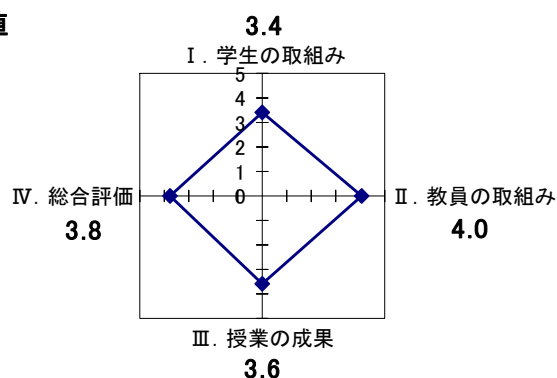
回答数(全体): 1855

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	22.4%	44.1%	26.1%	6.3%	1.1%	0
	2 授業以外によく予習復習した	3.0	11.2%	20.5%	34.3%	24.0%	9.9%	0
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	34.9%	41.5%	19.5%	3.4%	0.8%	5
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.2	42.5%	36.3%	18.2%	2.5%	0.6%	4
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	35.7%	36.1%	24.8%	2.5%	0.9%	17
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	31.9%	33.9%	25.2%	6.7%	2.3%	3
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.2	48.8%	28.6%	16.0%	5.4%	1.2%	3
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.7	25.4%	32.7%	30.7%	9.0%	2.3%	6
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	33.1%	37.0%	23.9%	4.9%	1.1%	1
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	36.8%	37.0%	20.3%	4.6%	1.2%	4
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.3	54.3%	29.2%	14.0%	1.7%	0.7%	1
	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	21.7%	39.2%	28.0%	7.9%	3.2%	15
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.5	22.3%	29.3%	29.3%	11.8%	7.3%	13

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.8	29.4%	32.3%	26.9%	6.7%	4.7%	98



分野別平均値



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成22年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

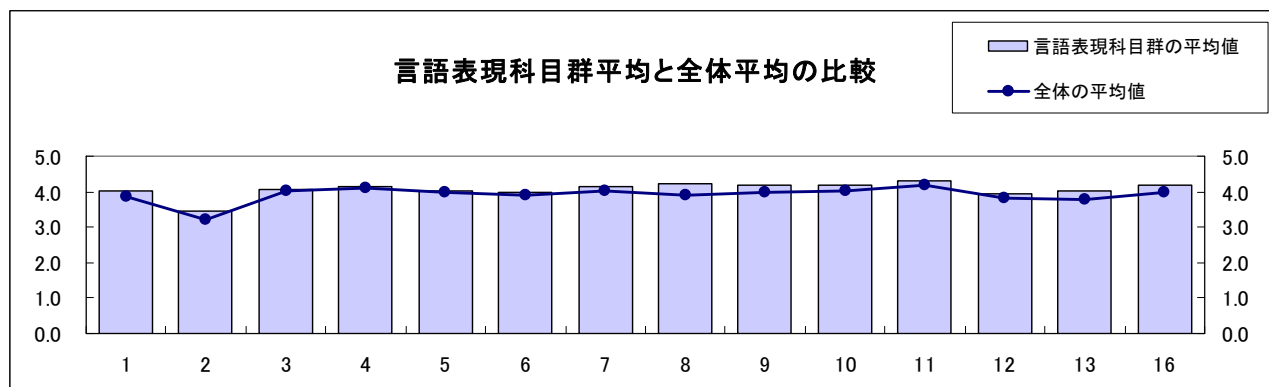
玉川大学

コア科目 言語表現科目群

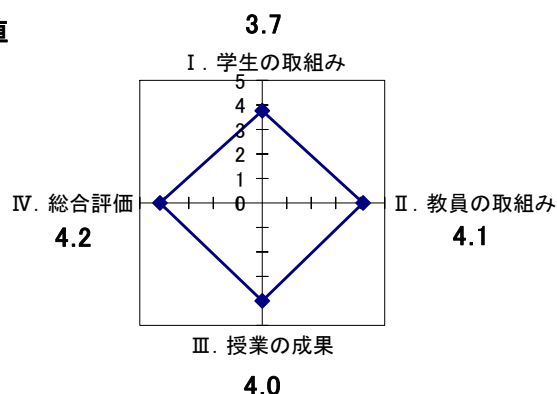
回答数(全体): 2813

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	4.0	31.0%	45.2%	19.8%	3.2%	0.7%	3
	2 授業以外によく予習復習した	3.5	16.1%	32.9%	36.1%	11.5%	3.4%	7
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	36.7%	39.1%	20.3%	3.1%	0.8%	13
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	40.7%	36.7%	19.6%	2.2%	0.7%	8
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	35.8%	36.8%	23.2%	3.1%	1.1%	11
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.0	36.4%	33.4%	23.9%	5.0%	1.2%	7
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	46.0%	30.6%	17.0%	4.9%	1.5%	4
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.2	47.4%	31.9%	16.9%	2.8%	1.0%	8
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.2	44.5%	33.4%	18.9%	2.3%	0.9%	11
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.2	44.9%	34.2%	17.6%	2.5%	0.8%	8
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.3	51.2%	32.5%	14.0%	1.8%	0.5%	6
	12 授業全体についてよく理解できた	4.0	32.5%	39.2%	20.9%	5.9%	1.5%	15
III	13 授業の内容に興味をもてた	4.0	39.3%	33.9%	19.7%	4.9%	2.2%	19

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.2	48.6%	29.5%	17.0%	3.4%	1.4%	311



分野別平均値



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成22年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

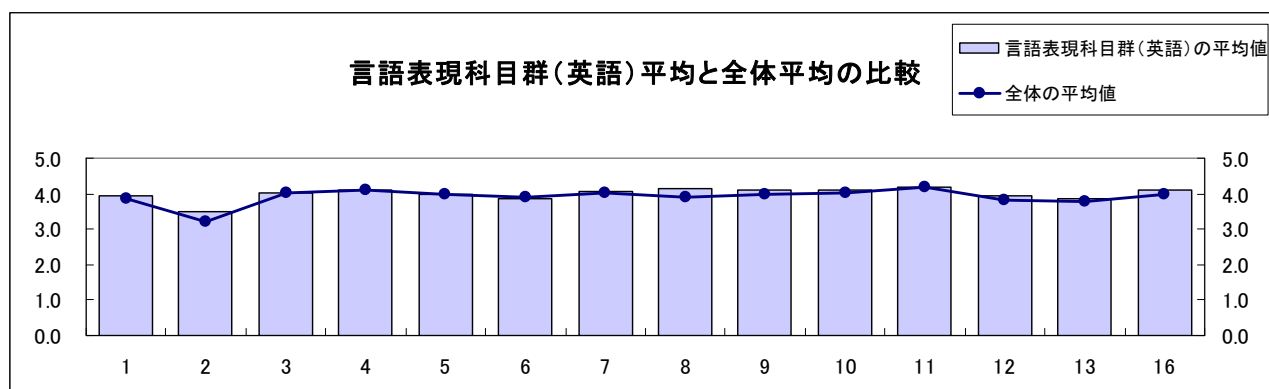
玉川大学

コア科目 言語表現科目群 英語

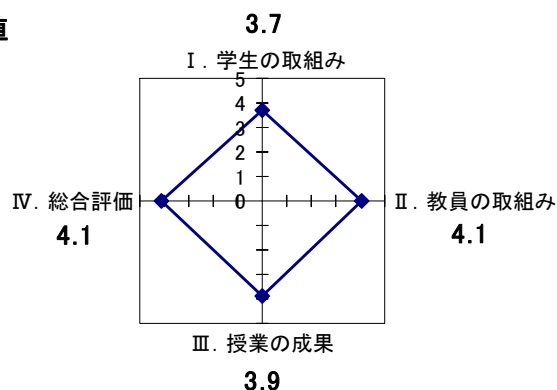
回答数(全体): 1320

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	28.5%	43.9%	21.9%	4.6%	1.1%	2
	2 授業以外によく予習復習した	3.5	17.8%	33.4%	33.0%	11.9%	4.0%	4
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	33.4%	40.2%	22.1%	3.3%	0.9%	6
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	37.9%	37.5%	20.8%	2.9%	0.9%	2
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	33.9%	36.7%	25.2%	3.3%	1.0%	4
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	32.8%	31.7%	26.9%	7.0%	1.6%	2
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	41.5%	31.4%	20.0%	5.5%	1.6%	2
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.1	41.9%	34.7%	19.0%	3.2%	1.2%	6
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.1	40.0%	34.1%	22.2%	2.6%	1.1%	6
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.1	39.2%	36.6%	20.7%	2.7%	0.8%	4
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	43.4%	34.8%	18.7%	2.6%	0.5%	3
	12 授業全体についてよく理解できた	3.9	32.3%	37.2%	22.9%	5.9%	1.6%	9
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.9	33.6%	33.1%	23.7%	6.6%	3.0%	10

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.1	44.1%	30.5%	19.7%	4.5%	1.2%	147



分野別平均値



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成22年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

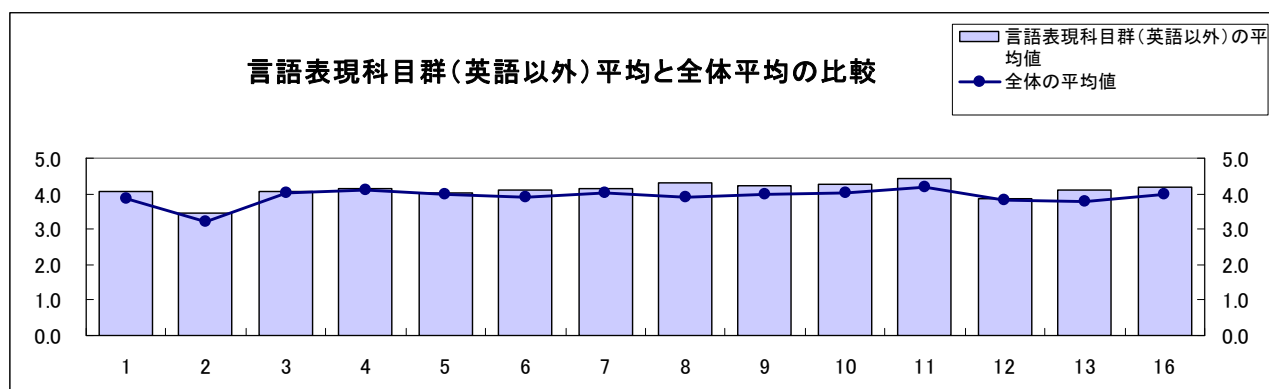
玉川大学

コア科目 言語表現科目群 英語以外

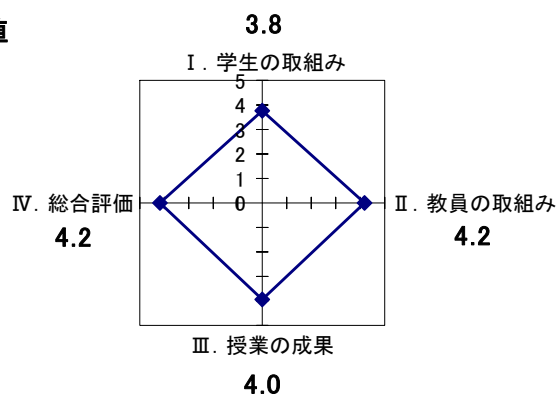
回答数(全体): 989

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	4.1	32.4%	46.0%	18.6%	2.4%	0.6%	0
	2 授業以外によく予習復習した	3.5	14.8%	33.0%	38.9%	10.4%	2.9%	1
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	36.9%	38.4%	20.0%	3.9%	0.8%	5
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	39.8%	37.5%	20.0%	2.1%	0.6%	3
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	35.0%	38.7%	22.5%	2.5%	1.3%	6
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.1	39.3%	35.3%	21.2%	3.3%	0.9%	2
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	45.3%	32.0%	15.5%	5.5%	1.7%	1
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.3	51.5%	31.7%	13.8%	2.1%	0.9%	1
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.2	46.2%	33.8%	16.5%	2.5%	0.9%	3
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.3	49.4%	32.4%	14.4%	2.8%	0.9%	2
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.4	58.1%	30.0%	10.1%	1.3%	0.5%	1
	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	26.2%	42.8%	21.6%	7.8%	1.6%	1
III	13 授業の内容に興味をもてた	4.1	40.0%	36.5%	18.2%	3.8%	1.6%	3

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.2	47.9%	30.6%	16.9%	2.9%	1.7%	106



分野別平均値



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成22年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

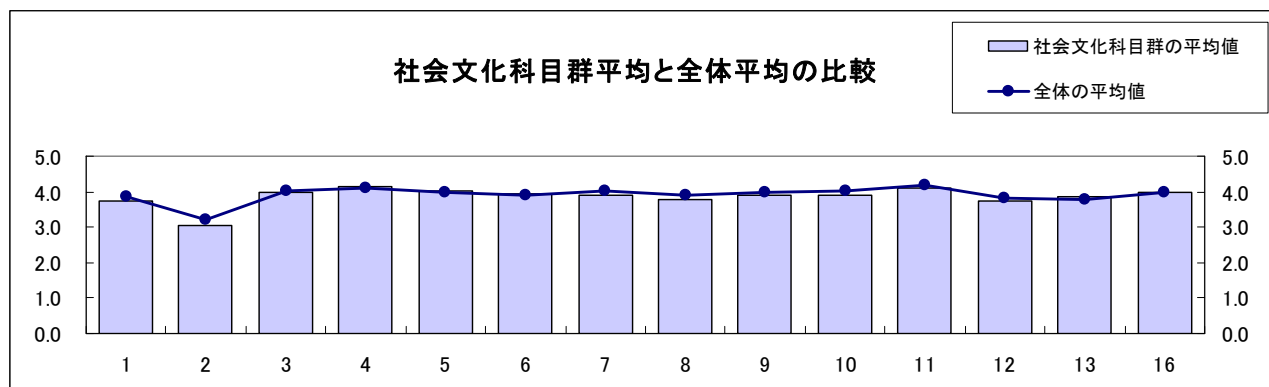
玉川大学

コア科目 社会文化科目群

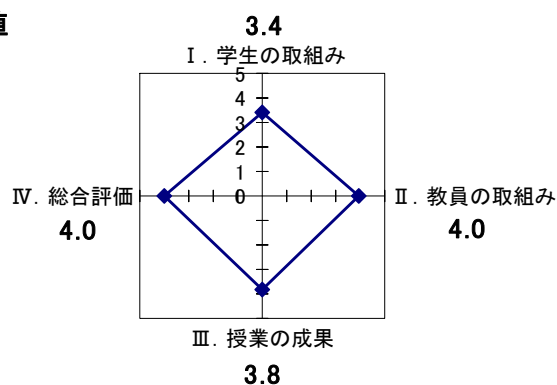
回答数(全体): 3307

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	21.3%	42.7%	28.4%	5.8%	1.8%	4
	2 授業以外によく予習復習した	3.1	10.6%	20.8%	39.9%	20.7%	8.0%	7
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	33.7%	38.7%	22.2%	4.4%	1.0%	12
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	40.2%	36.8%	19.3%	2.7%	0.9%	8
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	34.1%	37.5%	24.3%	2.9%	1.1%	14
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	34.6%	33.5%	24.2%	6.0%	1.8%	15
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	3.9	36.5%	30.8%	22.2%	7.9%	2.5%	11
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	30.7%	29.9%	28.5%	7.8%	3.0%	14
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	34.2%	32.6%	26.2%	4.9%	2.2%	13
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	32.0%	34.5%	26.0%	5.4%	2.1%	10
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	42.3%	32.2%	21.1%	3.0%	1.4%	11
	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	25.4%	36.4%	27.8%	7.7%	2.7%	23
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.9	33.9%	32.6%	23.2%	6.6%	3.7%	27

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.0	39.3%	30.2%	22.3%	5.4%	2.8%	424



分野別平均値



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成22年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

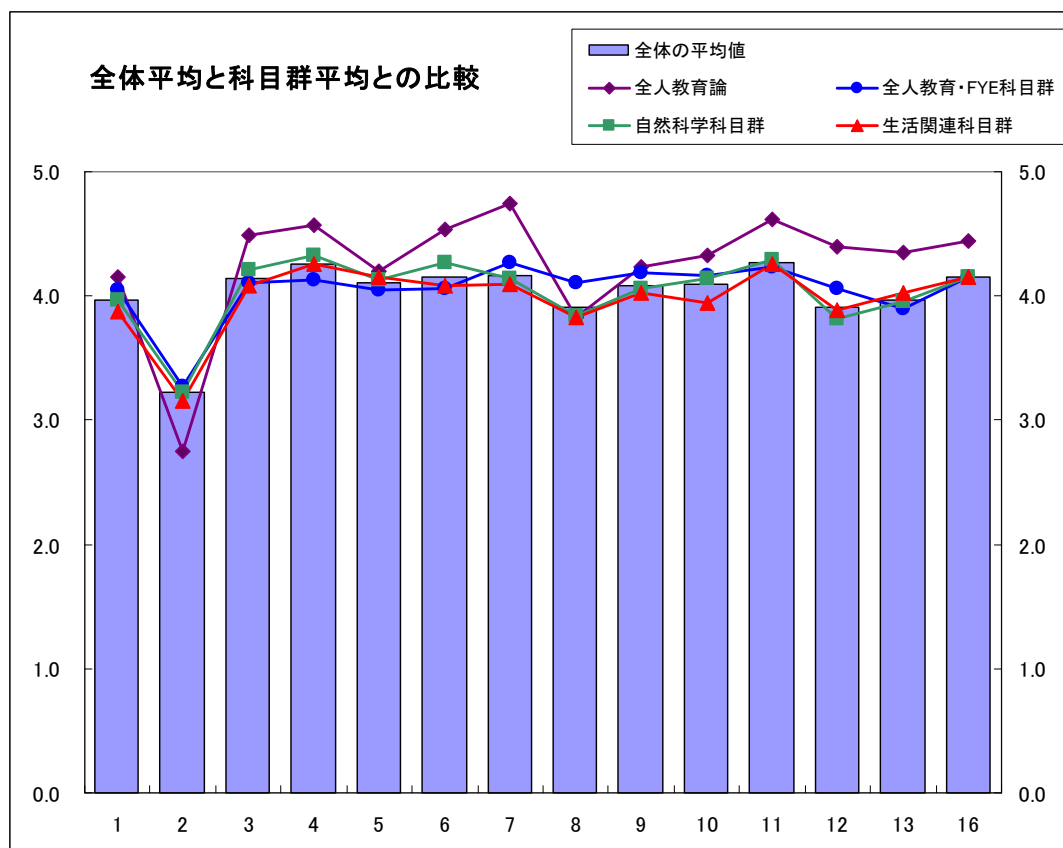
玉川大学

コア科目全体

回答数(全体): 6487

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	4.0	28.9%	44.4%	21.8%	4.1%	0.8%	10
	2 授業以外によく予習復習した	3.2	13.2%	24.9%	38.2%	17.9%	5.8%	10
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	40.8%	37.5%	17.8%	3.0%	0.8%	12
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.3	47.4%	34.0%	15.7%	2.2%	0.7%	12
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.1	40.5%	35.1%	20.7%	2.6%	1.1%	23
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.2	44.3%	32.5%	18.7%	3.5%	1.0%	40
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.2	47.6%	29.1%	17.3%	4.3%	1.8%	22
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.9	36.0%	29.8%	25.9%	6.2%	2.1%	19
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.1	40.6%	33.7%	21.0%	3.4%	1.3%	21
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.1	41.3%	33.2%	20.4%	3.7%	1.4%	20
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.3	50.0%	30.8%	16.4%	1.9%	0.9%	17
	12 授業全体についてよく理解できた	3.9	31.4%	37.4%	23.1%	6.3%	1.8%	30
III	13 授業の内容に興味をもてた	4.0	37.4%	31.9%	22.7%	5.7%	2.4%	41

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.2	46.6%	29.5%	18.6%	3.6%	1.8%	595



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を
除いた平均値

平均値 = (「5」回答数
× 5 + 「4」回答数 × 4 +
「3」回答数 × 3 + 「2」回
答数 × 2 + 「1」回答数 ×
1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミ
スの数

平成22年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

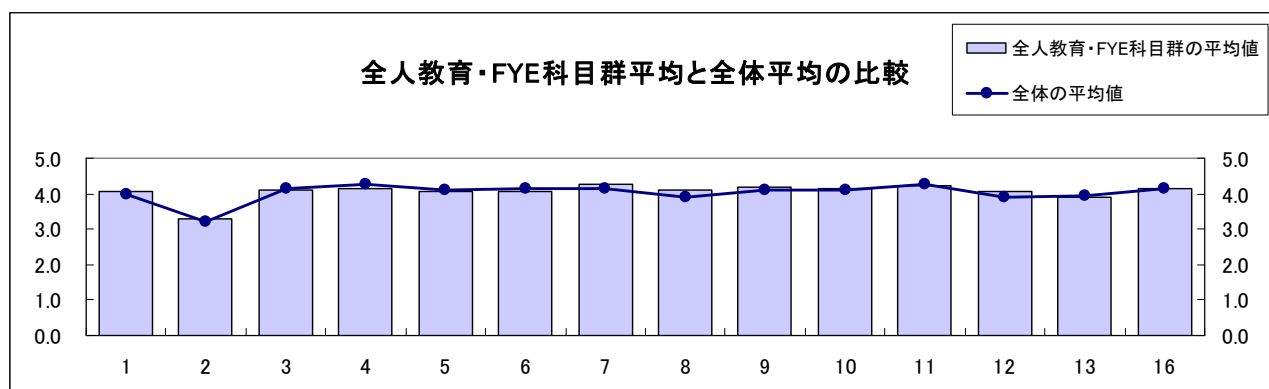
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群

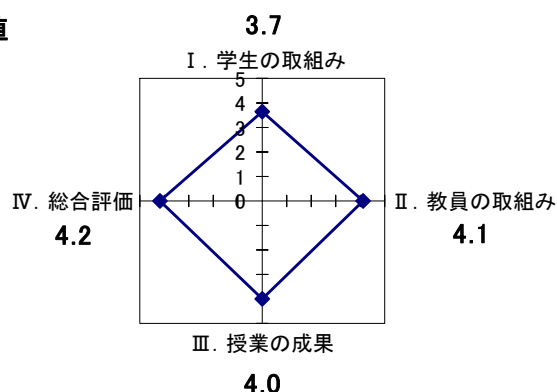
回答数(全体): 1858

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	4.1	32.1%	45.7%	18.1%	3.5%	0.7%	4
	2 授業以外によく予習復習した	3.3	15.5%	25.9%	35.2%	17.3%	6.0%	5
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	39.6%	37.2%	18.9%	3.4%	1.0%	4
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	41.5%	34.9%	19.7%	2.7%	1.2%	4
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	39.0%	34.2%	21.1%	4.1%	1.6%	6
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.1	38.3%	34.9%	22.1%	3.6%	1.2%	8
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.3	51.4%	29.3%	15.3%	2.5%	1.6%	5
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.1	42.7%	30.9%	21.6%	3.6%	1.2%	4
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.2	45.1%	33.3%	17.8%	2.7%	1.1%	7
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.2	44.9%	32.5%	18.4%	2.9%	1.3%	3
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	49.4%	30.3%	16.4%	2.4%	1.4%	7
	12 授業全体についてよく理解できた	4.1	36.0%	39.4%	20.7%	2.9%	1.1%	4
III	13 授業の内容に興味をもてた	3.9	32.8%	33.5%	26.3%	5.1%	2.2%	10

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.2	46.3%	30.0%	18.7%	3.0%	2.0%	32



分野別平均値



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成22年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

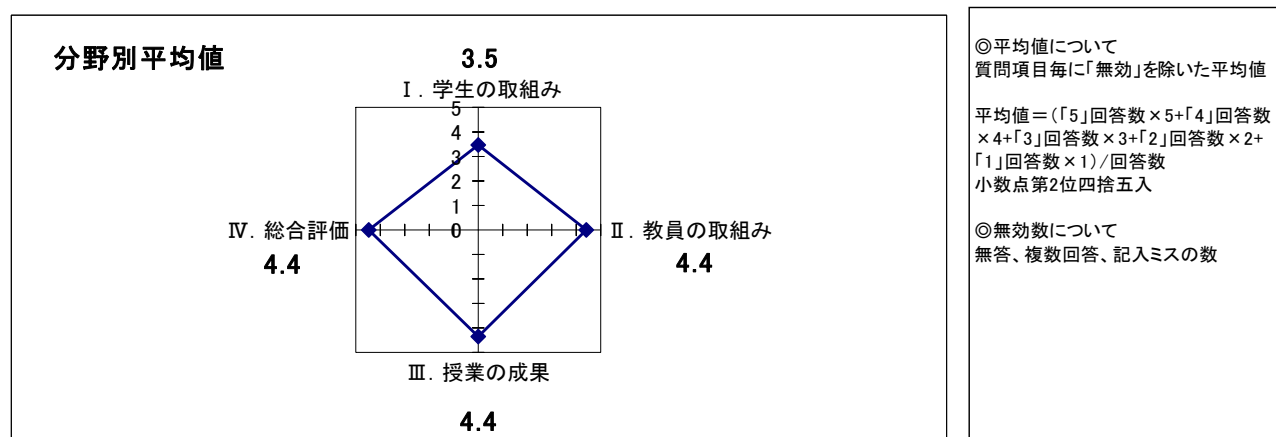
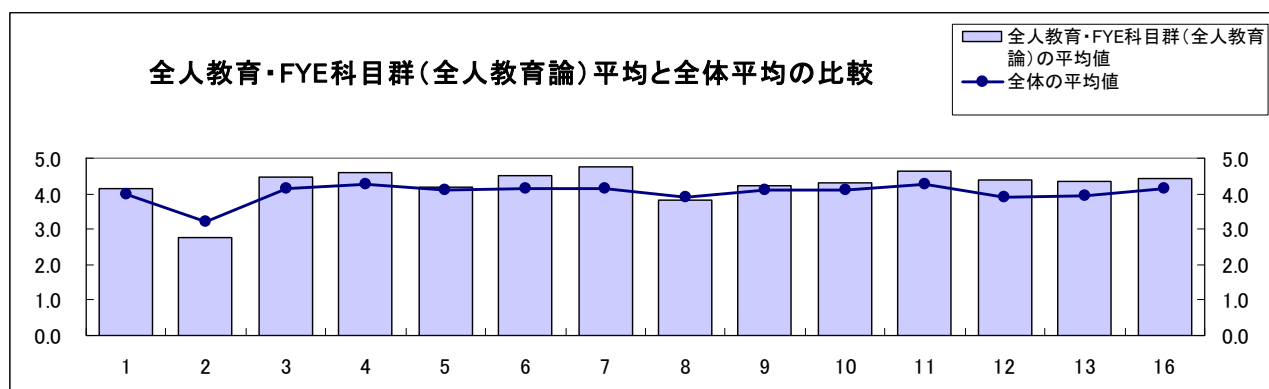
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群 全人教育論

回答数(全体): 66

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	4.2	33.8%	52.3%	10.8%	1.5%	1.5%	1
	2 授業以外によく予習復習した	2.8	9.2%	13.8%	35.4%	26.2%	15.4%	1
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.5	59.1%	30.3%	10.6%	0.0%	0.0%	0
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.6	68.2%	24.2%	6.1%	0.0%	1.5%	0
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.2	39.4%	42.4%	16.7%	1.5%	0.0%	0
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.5	67.2%	23.4%	6.3%	1.6%	1.6%	2
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.7	77.3%	19.7%	3.0%	0.0%	0.0%	0
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	36.4%	24.2%	28.8%	7.6%	3.0%	0
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.2	46.9%	35.9%	12.5%	3.1%	1.6%	2
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.3	50.8%	33.8%	12.3%	3.1%	0.0%	1
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.6	69.2%	24.6%	4.6%	1.5%	0.0%	1
	12 授業全体についてよく理解できた	4.4	50.0%	39.4%	10.6%	0.0%	0.0%	0
III	13 授業の内容に興味をもてた	4.4	52.3%	35.4%	9.2%	1.5%	1.5%	1

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.4	62.3%	24.6%	9.8%	1.6%	1.6%	5



平成22年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

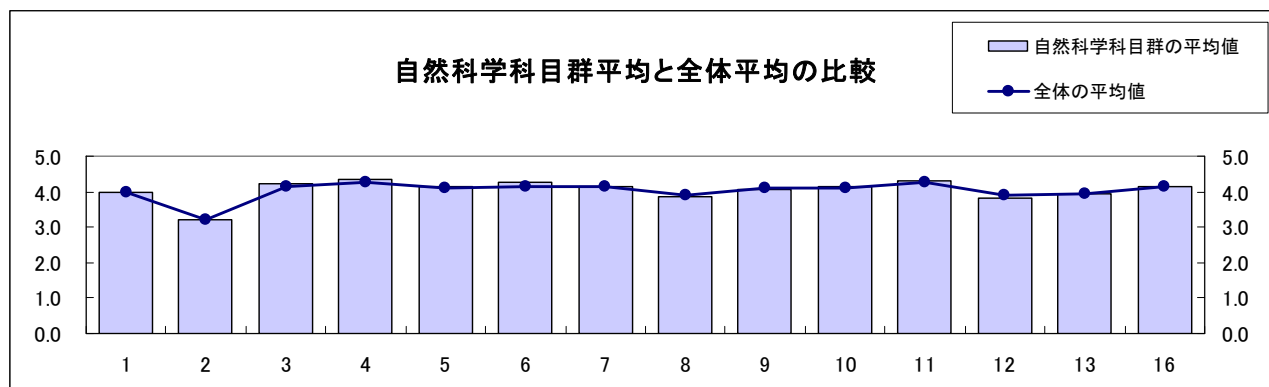
玉川大学

コア科目 自然科学科目群

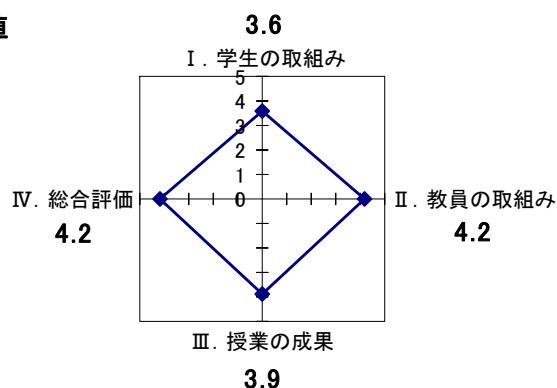
回答数(全体): 2821

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	4.0	29.1%	44.0%	22.5%	3.8%	0.7%	2
	2 授業以外によく予習復習した	3.2	12.6%	25.4%	38.8%	18.2%	4.9%	3
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.2	43.4%	37.2%	16.5%	2.3%	0.5%	1
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.3	51.0%	33.6%	13.3%	1.7%	0.4%	6
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.1	41.2%	34.5%	21.2%	2.0%	1.1%	10
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.3	49.3%	31.9%	15.4%	2.7%	0.7%	6
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	46.4%	30.0%	16.8%	4.9%	1.8%	5
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	32.3%	30.5%	28.3%	6.7%	2.1%	6
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.1	38.5%	34.9%	22.2%	3.4%	1.0%	7
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.1	42.8%	33.7%	19.4%	3.1%	1.0%	6
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.3	50.8%	31.1%	15.9%	1.4%	0.7%	2
	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	28.0%	37.0%	25.0%	8.2%	1.9%	12
III	13 授業の内容に興味をもてた	4.0	36.8%	32.8%	22.2%	6.0%	2.1%	15

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.2	46.1%	29.6%	19.0%	3.8%	1.4%	342



分野別平均値



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成22年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

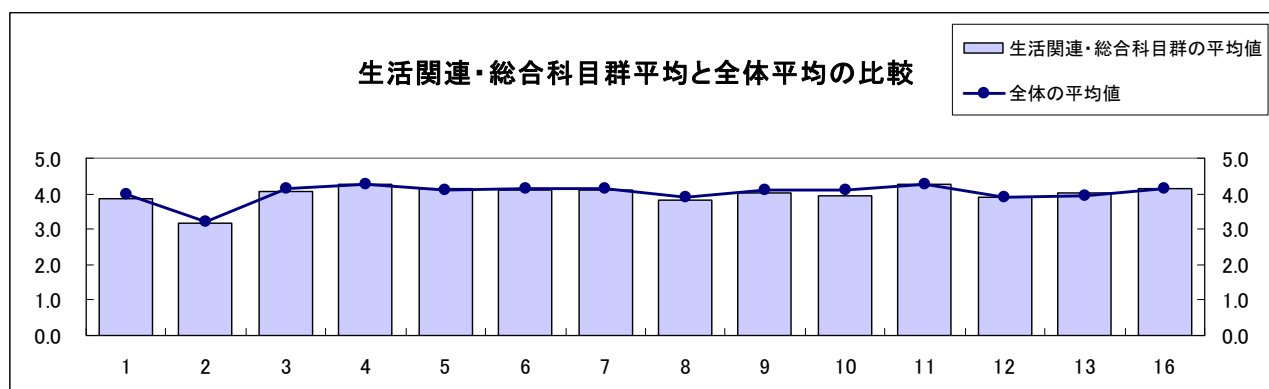
玉川大学

コア科目 生活関連・総合科目群

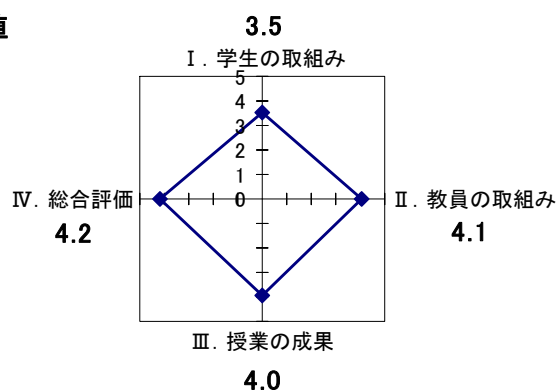
回答数(全体): 1808

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	25.4%	43.6%	24.8%	5.2%	1.0%	4
	2 授業以外によく予習復習した	3.2	11.7%	23.2%	40.3%	18.1%	6.8%	2
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	38.0%	38.3%	18.9%	3.7%	1.2%	7
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.3	48.0%	33.7%	15.2%	2.4%	0.7%	2
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.2	40.9%	36.8%	19.5%	2.2%	0.6%	7
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.1	42.5%	31.1%	20.4%	4.5%	1.5%	26
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	45.6%	27.3%	20.0%	5.1%	1.9%	12
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	34.8%	27.6%	26.6%	8.0%	3.0%	9
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	39.3%	32.2%	22.2%	4.3%	2.0%	7
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	35.3%	32.9%	24.1%	5.6%	2.1%	11
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.3	49.5%	30.7%	17.0%	2.1%	0.8%	8
	12 授業全体についてよく理解できた	3.9	32.1%	35.9%	22.9%	6.7%	2.4%	14
III	13 授業の内容に興味をもてた	4.0	43.0%	28.6%	19.8%	5.8%	2.8%	16

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.2	47.6%	28.7%	17.6%	4.0%	2.0%	221



分野別平均値



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

参 考 資 料

参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 22 年 4 月 26 日 (月) 17:30～19:20
- 場 所 : 教学事務棟 150・151 会議室
- 議 題 : (1) 平成 22 年度 会議日程に関する件
(2) 平成 22 年度 FD ワークショップに関する件
- 報 告 : (1) 「玉川大学の現状と将来像に関する調査」報告書に基づく課題—教育研究活動
等点検調査委員会教務関係専門分科会への諮問事項について
(2) FDer 養成講座開催について
(3) コア科目 学生による授業評価アンケート 改訂について
(4) 他大学等提供のシンポジウム等および資料提供について
(5) 学士課程教育センター (コア・FYE 教育センター) 主催研修会等 DVD の貸し出しについて

第 2 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 22 年 5 月 17 日 (月) 17:30～19:00
- 場 所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 議 題 : (1) 平成 22 年度 F D 研修会等に関する件
(2) 「玉川大学の現状と将来像に関する調査」報告書に基づく課題の改善策に関する件
- 報 告 : (1) 大学院 FD 委員会報告
(2) 「平成 21 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付方法について

第 3 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 22 年 7 月 19 日 (月) 17:30～19:00
- 場 所 : 学士課程教育センター Faculty Room
- 議 案 : (1) 次年度新任教員との情報交換に関する件 (平成 22 年度 新任教員研修会との合同開催)
- 報 告 : (1) 大学 FD 委員会主催研修会等開催報告
(2) 授業デザインに関する書籍について
(3) 今年度の各学部の FD 活動計画について

第4回大学FD委員会

- 日 時 : 平成22年9月20日(月) 17:30～19:00
- 場 所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 議 案 : (1) コア科目 学生による授業評価アンケート 改訂に関する件
- 報 告 : (1) 「TAMAGAWA 2020VISION」について
(2) 大学FD委員会主催研修会等開催報告等について
(3) 各学部FD活動計画および授業参観実施計画書の提出について
(4) 国立教育政策研究所主催高等教育開発セミナー「3つのポリシー(DP・CP・AP)をどう構築するのか?～学士課程教育の一貫性～」報告

第5回大学FD委員会

- 日 時 : 平成22年11月15日(月) 17:30～19:00
- 場 所 : 学士課程教育センター Faculty Room
- 議 案 : (1) 平成23年度 新任教員研修会に関する件
(2) 平成23年度 コア科目 学生による授業評価アンケートに関する件
- 報 告 : (1) 大学FD委員会主催研修会等開催報告等について
(2) 各学部授業参観実施計画およびFD活動計画について
(3) コア科目 学生による授業評価アンケートについて
(4) 「平成22年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の作成について

第6回大学FD委員会

- 日 時 : 平成23年1月17日(月) 17:30～19:00
- 場 所 : 学士課程教育センター Faculty Room
- 議 案 : (1) 平成23年度 コア科目 学生による授業評価アンケートに関する件
(2) 「平成22年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の作成に関する件
- 報 告 : (1) 大学FD委員会主催研修会等開催報告等について
(2) 各学部FD活動計画について
(3) 平成22年度 授業参観全学教職員公開結果について
(4) コア科目 学生による授業評価アンケートについて

第 7 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 23 年 3 月 7 日 (月) 17:30～19:00
- 場 所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 議 案 : (1) 平成 23 年度 コア科目 学生による授業評価アンケートに関する件
(2) 大学 FD 委員会主催研修会等の参加率に関する件
- 報 告 : (1) 「平成 22 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の作成について

参考資料 2. プレゼンテーション研修会アンケート用紙

各項目ごとにA～Eでランクをつけてください。

その際、Aは「全くそのとおり」、Eは「全くそのとおりでない」という評価です。

1. 全体についての感想をお聞かせください	A	B	C	D	E	フリー・コメント
・総合的に満足されていますか						
・担当する授業に役立つと思いますか						
・ご自身のプレゼンテーション・スキルは 向上したと思いますか						

2. 研修会の内容についてお聞かせください

・研修内容は適切でしたか (2日間という時間制約を考慮に入れてお答えください)						
・講師の説明は理解しやすかったですか						
・テキスト、教材、教具などは適切でしたか						

3. 研修会の運営についてお聞かせください

・2日間という日程は適切ですか (不適切な場合は、フリー・コメントをご記入ください)						
・時間配分は適切ですか (不適切な場合は、フリー・コメントをご記入ください)						
・開催場所、施設などは適切でしたか						
・事務手続き、連絡などは適切でしたか						

4. 今後のFD研修会についてお聞かせください

・この研修の開催を継続することに賛成ですか						
・この研修の受講を、他の人にも勧めますか						
・どんな内容の研修会を希望しますか (複数記入可)						

5. その他の感想、コメントなどありましたら、別紙に自由にお書きください。

今後のFD研修会開催および運営の参考資料とさせていただきます。

参考資料3.「コア科目授業評価アンケート」用紙

玉川大学

－授業改善のための－

【コア科目】

平成22年度 学生による授業評価アンケート

このアンケート調査は授業担当教員が学生諸君と共に、授業をより改善することを目指して実施するものです。記入に当たっては、授業の全体を視野に入れた、責任ある評価をお願いします。なお、このアンケートがあなたの成績に影響することは一切ありませんので、氏名などは記入しないでください。

記入日	学年
年 月 日 曜日 時限	①1年 ②2年 ③3年 ④4年 ⑤その他

授業科目名

担当教員名

(非常に良い)	(良い)	(普通)	(あまりそう思わない)	(全くそう思わない)
---------	------	------	-------------	------------

以下の質問について、該当する番号にひとつだけ○をつけてください。

あなたの取り組み						
1	授業には意欲的に取り組んだ	5	4	3	2	1
2	授業以外によく予習復習した	5	4	3	2	1
教員の取り組み						
3	毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	5	4	3	2	1
4	毎回よく授業の準備がされていた	5	4	3	2	1
5	シラバスにそって授業が行われた	5	4	3	2	1
6	教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	5	4	3	2	1
7	教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	5	4	3	2	1
8	授業中に学生の参加（質問・発言など）を促し、適切に対応した	5	4	3	2	1
9	教員は良い学習環境を保つよう努力した	5	4	3	2	1
10	教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	5	4	3	2	1
11	教員は毎回熱意をもって授業をした	5	4	3	2	1
授業の成果						
12	授業全体についてよく理解できた	5	4	3	2	1
13	授業の内容に興味をもてた	5	4	3	2	1
担当教員が科目毎に設定する設問						
14		5	4	3	2	1
15		5	4	3	2	1
総合評価						
16	この授業を受講してよかったと思う	5	4	3	2	1

その他、意見、要望、感想など自由に記述してください。（裏面使用可）

--

参考資料 4. 玉川大学FD委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(平成 21 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

第1条 玉川大学（以下「本大学」という。）教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

第2条 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長は教学部長とする。
- 3 委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 4 委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
- 5 本委員会には学部ごとの部会を設けることができる。
- 6 前項による部会は、各学部ごとに設け、部会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

第3条 委員の任期は1か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

第4条 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

- 2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

第5条 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(部会)

第6条 各部会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

第7条 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

第8条 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

第10条 本委員会に係る事務主管は、学士課程教育センターとする。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

平成 23 年 5 月発行

発行 玉川大学 FD 委員会

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8866 (学士課程教育センター)